

特 100

189

書叢著名
譯 全
に界世の星

作フーレドンア



始



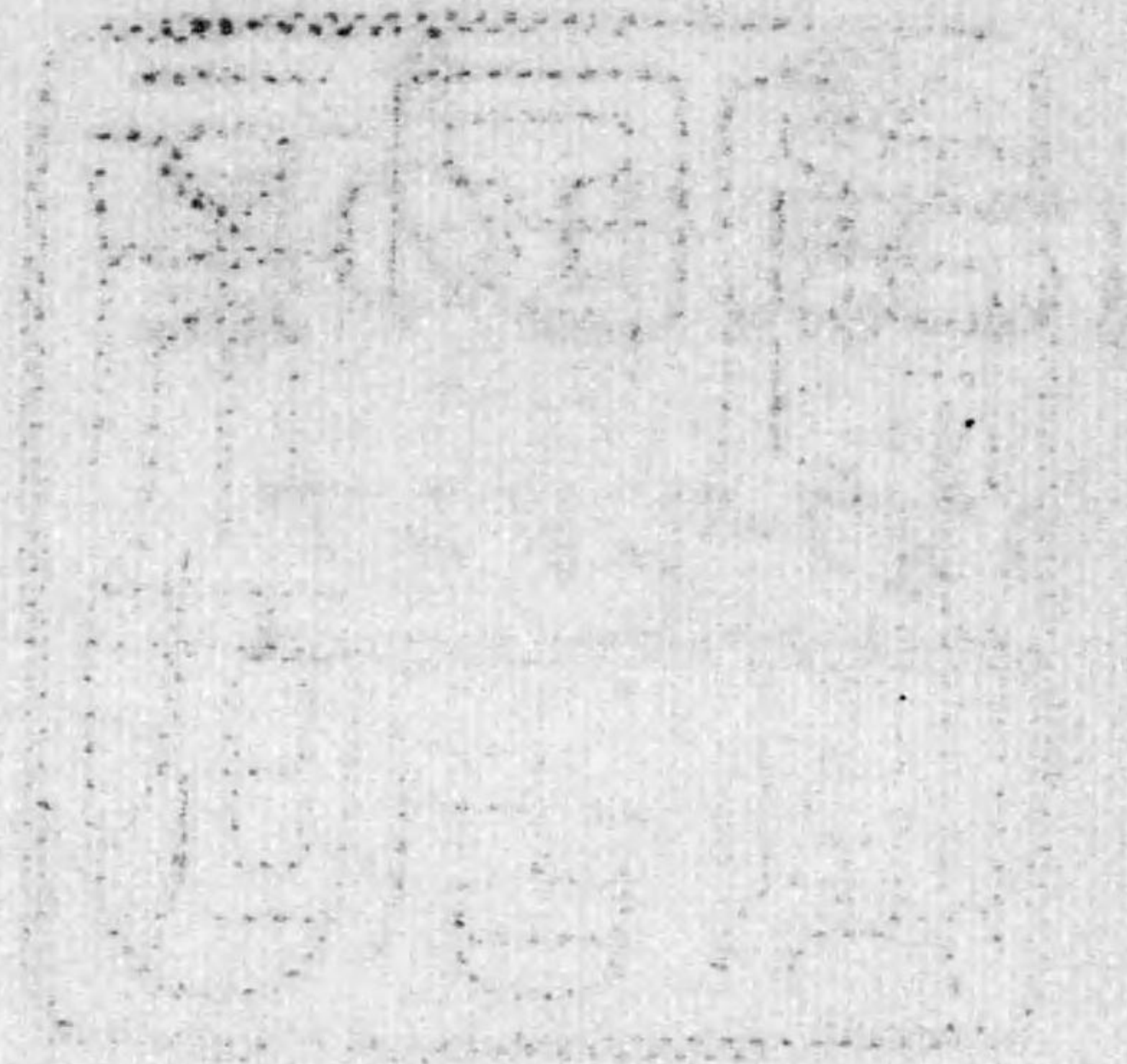
持 100
189

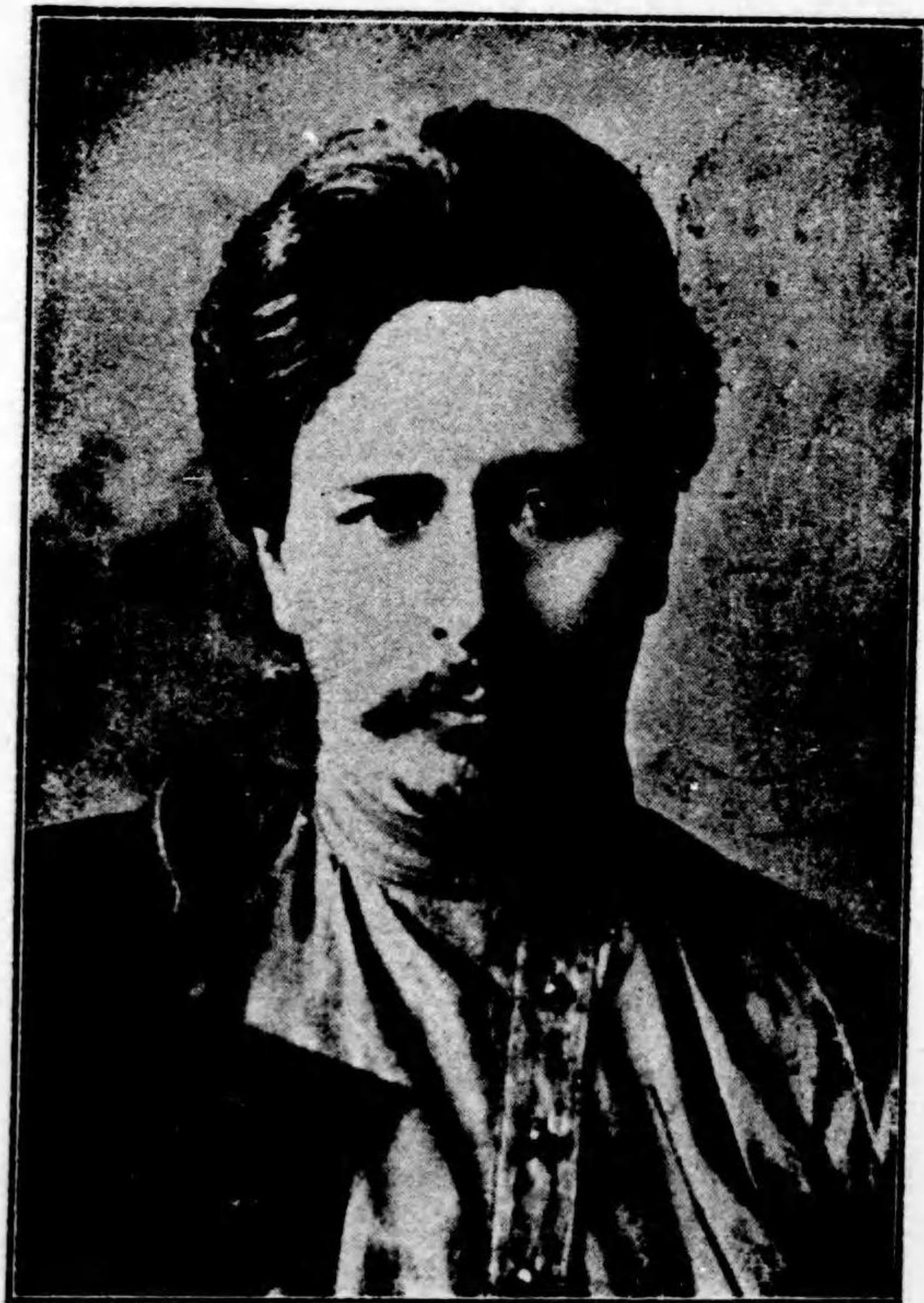
編四十第書叢著名



露國文豪
アンドレエフ作
星
の
世界
に

大正
3. 11. 5
内交





氏フエドニア 者著原



解題

- ◎最近二十一年間に於る露國文壇の中心は、ゴリキイとアンドレエフである。
- ◎本篇は、アンドレエフが、戯曲の第一作として世に知られたるもの、彼の露國革命に對する意氣を、最もよく現はしたるものである。
- ◎彼の小説家としての伎倆は一九〇二年の「淵」より以來、一世の認る所となつたが、一九〇五年に公けにした此の社會劇以後、彼がドラマチストとしての伎倆、亦遙かに偉大なるものとせらるゝに至つた。
- ◎彼の戯曲は、此の "Zu den Sternen" 以後、本年公けにされた "Thou shall not kill" (汝、殺す勿れ) に至るまで十四作の多きに達して居る。
- ◎殊に其 "Sava" の如きは、ウ井ン、伯林の大劇場に演ぜられ、最近には伯林の自由劇場に於て絶大なる成功を収めた由である。
- ◎本篇の紙数は豫定を超過したれば、彼の小傳は他日更めて記すことにした。

大正三年十月十五日

譯者 守田有秋

全星の世界に

レオニイド・アンドレエフ作
守田有秋譯

『是はウラニヤの寺院なり。空しき憂ひよ、遠く去れ！ 低き地』
は此處に蔑まる。此處よりは空高く星の世界に到るべし』

セルゲイ・ニコラエキツチ・テルノウスキイ 外國に住居する露西亞の學者。或
天文臺の主監。多數の學會及びアカデミーの委員として知名なる人。齡五十
六、されど齡よりは若く見ゆ。愉快にして、靜かに、頗る確定したる學識。

此書を我母アナスタシヤ・アンドレエフに
捧ぐ

(レオニイド・アンドレエフ)

身振りも亦それと同様に、謹厳にして、且つ確乎たり。——餘計なる事は一つもせず、用意周到の人なれど、而も總てに冷淡なり。

インナ・アレクサンドロウナ。其妻、殆ど同じ年輩。

ニコライ。二十七歳。(長男)

アンナ。(長女)二十五歳、美しく瘦形、無趣味なる服装、鼻眼鏡をかける。

ペエチヤ。(次男)十八歳、蒼白く、愛嬌ありて、弱々し氣なり。黒き縮れたる髪の毛、白き折襟を付け居る。

ウエルチヨウツエフ・ワアレチン・アレクセキツチ。長女アンナの夫、三十歳、赤髪、自信強く、命令的にして、悪口好き、時々無作法になる。技師なり。

マルシヤ。ニコライの許嫁、二十歳、美人。

ポラアク。丈高く、瘦形、大いなる禿頭。舉動正確なる三十二歳の男。

老夫の婦の兒

稍器械的なり。葉巻を吸ふ。

ルンツ・ヨゼフ・アブラモウキツチ。猶太人、廿八歳、常に、精密なる器械を取扱ふが故に、其舉動にも、稍々控目なる所と、精密なる所とあり、されど興奮する時は、自我を忘れて、南方人の激越なる身振をなす。

テルノウスキの助手

ジトフ・ワシリ・ワシリエウイツチ。巨なる、毛むくじやらかな男、熊に似たりと思はるゝ所あり、常に坐す。種類の好男子。年齢不明

トライチユ。労働者、三十歳。色黒く、瘦形、頗る愛らしき男、深く興味を帯びたる眉、遠視の利く男。質朴、直面目、無口。

ストルツ。なりの小さな青年、特徴なけれど、輪廓正しき容貌、身奇麗に着物を着たり。美しき聲にて話す、無意味なる印象を興ふ。

或老婆。

第一幕

山上の天文臺。深更。舞臺は二個の部屋を現はす。一つは白き厚き壁を有する食堂の如き大なる部屋にして、廣き窓棹を持たる窓の後に暗黒の中に或る白きもの荒れ狂へるを見る。大いなる煖爐には薪燃ゆ。單純にして嚴肅なる裝飾。軟弱なる家具及び窓掛けを有せず。壁には二箇の版畫、天文學者の肖像、星に導かれて來れる東方の學者の畫など。圖書室及び主人テルノウスキイの書齋に到る階段。後ろの室は廣き仕事部屋にして大體前の室に似たり、されど暖爐なし。二三の札。星の寫眞及び月の表面の寫眞など掛れり、二三の極めて簡單なる器械。テルノウスキイの助手ポラアク、坐して仕事を爲せり。前の室にはインナ・アレクサンドロウナ及びヂトフ談話す。ペニチヤ(次

男) 讀書す、ルンツは室内を行來す。爐の傍には獨逸人の下女珈琲の仕度をなす。窓の後ろには泣くが如く或は咆ゆるが如き吹雪の音。暖爐の中にては薪音をたて、爆れ居る、同じ間を歩いて道に迷へる者を呼ぶ鐘の音響く。

主人の妻『あゝ鳴てるわ、鳴てるわ、だけど何んの益にもたちや仕ない。もう四日になるけれど、人ツ子一人來やア仕ないぢやないか。皆んなが坐つて居るわ、一體人間は未だ何處かに生きて居るのだらうかと、坐つて考へて居るわ』

次男(書物から顔をあげて)『誰がやつて來るもんですか。來る用事がないぢやありませんか』
主人の妻『だけど一人位は——。誰れか一人位は下の方から來さうなもんだね』

え」
次男「此山を登つて来るのは随分大變ですからね」
ジトフ「さうだ、却々大變だ、恰度包圍された町のやうに世間から切斷されて居るんだからね」

主人の妻「もう一日二日経つと、妾達は何も食べる物が無くなりますわ」

ジトフ「それなら、唯坐つて居る丈です」

主人の妻「ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、貴方はそんな暢氣な事を官つて在つ

しやいます、——貴方は熊のやうに八日間も御自分の脂肪で生きて行かれる

ものだからそんな暢氣な事を仰しやるけれど、妾やセルゲイ・ニコライ井ツ

チは何うしたらいいのですか」

ジトフ「では貴女は、彼の方の爲に何かとつて置いてお上げになつたらいいで

せう、僕達は我慢を爲て行きますから。レンツ君——おいレンツ君——君、

まあ掛け給へ」

(レンツは答へずして尙ほ室を往來す)

主人の妻「まあ随分な處だわねえ、静——誰か戸を叩いたやうですわ、静!

(聞耳を立てる) 矢張り爾うぢやないんだわ。まあ、何んて吹雪でせう、妾

達の國にも恚んな吹雪はありませんわ」

ジトフ「いや高原にはありますよ」

主人の妻「妾はまだ高原に住んだことがないから知りませんわ、——まあ、何

んて窓に吹き付けるんでせう」

次男「阿母さん、待つて居たつて黙目ですよ、誰も來やしませんから」

主人の妻「でも多分……(間)ぢや、もう何度も何度も讀んだ古新聞でも讀むの

かれ——それとも外に何か?——ヨセフ・アラモ井ツチさん、貴方何か消息

を聞きませんか」

ルンツ（立止り）『知る理由がないぢやありませんか、妙なことをお聞きになり
ますれ、全然没交渉のことぢやありませんか、……冗談ぢやない、まあお自
分に聞いて御覽なさいまし、私が知る理由があるか無いかと云ふことを、ほ
んとうに如何な方だ！』

主人の妻『まあ、妾唯そんなに思つたのですよ……何卒直ぐ怒らないで下さい
まし。皆が何うなつたかと思ふと妾の胸は裂けるやうですよ、あゝ！』

ジトフ『あの人達は戦つて居るんですよ』

主人の妻『戦つて居るんですよ！。ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、貴方はお
自分の身内の者が其事に關係して在しやらないからそんなに暢氣に仰しやる
けれども、妾の子供は彼處へ行つて居るんですよ、それなのに、森の中に居る
やうに、消息と言つたらばこれん許も知ることが出来ないんですよ……さ
うです、全然森の中に居るやうですわ！ でも森の中なら鳥も飛びませうし、

兎も走りませうが、此處ばかりは……』

ルンツ（行きかけて）『多分もう最後の勝利を得て居るでせう、多分古いものを
破壊した上へ、新しい世界を建設して居るでせう』

ジトフ『私はさうは信じない、何うもさうは思はれない』

次男『何故君は其を信じないのだ、君は新聞を讀んだぢやないか、内閣が總辭
職をしたことも、全市がバリカアデで圍まれたことも、民衆がもう市役所を
占領したことも、新聞で讀んだぢやないか。そして此五日間に何んなことが
出来たか判りやしない』

ジトフ『さあ、僕には分らないね。まあ掛け給へルンツ君、僕の計算に依ると
君は先日からもう二百基米も歩いて居るぜ』

ルンツ『うつちやつて置いて呉れ給へ、僕は君の邪魔しやしないんだから、君
も僕の邪魔をしないで呉れ給へ、他人の生活に干渉するなんてことは非文明

極まることだ。僕は君に向つてこんなことを言やしないぢやないか『ジトフ君、君は、何時迄も夢を見て居給ふな、君は「永久」を一つ位寝て了つたのだ』
こんなことを僕は言やしないぢやないか』
(次男ペエチヤはルンツの傍に歩み何事か小聲にて話す、二人は相列んで歩み、互に一言二言言ひ交はす)

主人の妻 (ジトフに叫く) 『まあ何んて怒りつばいんでせう！ ねえ、ワシリ・ワシリエ井ツチさん、何を考へて在しやるの——珈琲でも飲んで氣を晴らさうぢやありませんか』

ジトフ 『僕はお茶の方がいゝんです』

主人の妻 『え、さうですとも！ 妾もお茶が飲みたいんです、だけど、何處にもお茶はないぢやありませんか、覆盆子水を入れたお茶は悪くありませんわねえ』

ジトフ 『僕に砂糖丈入れたのがいゝんです』

主人の妻 『御覽なさいまし！ 奇態なものぢやありませんか、ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、妾は此處にすつかり馴れて了りましたのよ、此山にも、此無人境なものにも馴れて了りましたの——だけど、唯露西亞の白樺のこと丈は忘れぬことは出来ませぬわ、妾が其白樺のことを考へると、其白樺のことを思ひ出しますと——愚かな者のやうに、二時間も泣き通すんですわ、妾共の持地面には、山の上に家が建つて居て其が白樺の林で圍まれて居るんですわ——あゝ、あゝ、あゝあの林！ 雨の降つた後で、何時もいゝ香ひがして來るのですよ、夫は……夫は……』 (涙を拭ふ)

ジトフ 『貴方は此處を發つて二月許り露西亞の方へ旅行をなすつたらいゝぢやありませんか』

主人の妻 『では此處には唯が留守をするんで御座いますか。主人も行けと度々』

妾に申して居るんですけれども——ですけれども、そんな譯にも行きませんわ、若し不意に主人が病氣にでもなつたらどうしませう、妾達ばもう若い者ぢやないんですから』

ジトフ『妾が留守をして居ます』

主人の妻『いゝえもう仰しやるな、白樺などはなくつても辛抱して行かなきゃなりませんわ。妾は唯ひよいとそんなお話をしてみたくて見たくて、いゝえ此處だつて結構ですわ、それに、もう直きに春にもなりますから……』

ジトフ『それぢや若し御主人が西比利亞へでも送られるやうな事になりましたら、貴女は御一緒に御出でになりますか』

主人の妻『えゝ、何うして一緒に行かないで居りませうか、西比利亞にだつて人は住んで居るんですもの、何にも外の物は無いにしても——』

ジトフ『いや奥さん、貴女は實に傑い御婦人です』

主人の妻(親しげに)『まあ、貴方は痴愚ね、妾のやうなお婆さんにそんな言葉を使ふものぢやありませんよ、それはさうとしてワシリ・ワシリエウ井ツチさん、貴方は結婚をなすつては何うですの、此處で世帯をお持ちになつては何うですの、妾とセルゲイ・ニコラエ井ツチのやうに』

ジトフ『いゝえ、それは僕には駄目です、僕は一處に居ることは出来ないんですから』

主人の妻(笑ひ)『さうらしいやうですれえ』

ジトフ『えゝさうなんです、僕は今日此處に居るかと思へば、明日は彼處に居ります、僕は天文學だつて直きに打棄つて了ひます、僕はまだ濠洲へ行つたことがないんですから——』

主人の妻『濠洲へ行つて何をなさるんですか』

ジトフ『何もするんぢやありません、僕は彼處の人間が何んなにして生活して

居るか見度いのです」

主人の妻「でも貴方、お金が無いでせう、ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、お金があるから旅行が面白く出来るんですからね」

ジトフ「僕は旅行するんぢやないんです、僕は唯行けばいゝのです、鐵道が、それとも、工場に使つて貰ふと思ひます」

主人の妻「天文臺から、——工場へですつて？」

ジトフ「何故それが不可ないんですか、直きに覺はりますよ、僕は多少器械のことを知つて居ますから、それに僕は暮しにさう金を掛けやしませんから、僕は贅澤な人間ぢやないんですから」

(間。吹雪更に烈しく吹く)

次男「阿母さん、阿父さんは何處に在しやるんですか、お仕事なんですか」

主人の妻「あゝ、誰も寄越してはいけないと仰しやつたんだよ」

次男(肩を聳やかし)「阿父さんは、よくもこんな時に仕事が出来ますね、僕にや解らない」

主人の妻「あゝ、そりや阿父さんは仕て居られるさ、それともお前は當もなく、彼方へ行つたり此方へ行つたりして居るのが可いと思ひかえ、そらポラアクさんも仕事をして在しやるぢやないか」

次男「あゝ爾う、爾う。ポラアク君……、あの人の事は毫とも考へなかつた、

ポラアク君！(ルンツと小聲で話す)

ジトフ「ポラアク君は實に天才的な人物です、あの人は五年の中に有名な人になるでせう。あの人は精力家だ(主人の妻笑ふ)何故貴女は笑ふのですか、僕の言ふのが違つて居るのですか」

主人の妻「いゝえ妾は其事を笑つたのぢやないんです、あの方はほんとうに妙な方ですわ、——笑ふことは悪いかも知れませんが耐へて居ることはとても

出来ませんわ、あの方は何かの器械に似てる處がありますわ——貴下方の天文の器械の中で、あの方と同じ器械があるでせう』

ジトフ『僕は知りません』

主人の妻『多分觀象儀と云ふ器械でせう』

ジトフ『僕は知りません、何うして貴女が笑へるのか——僕には不思議です』
主人の妻（溜息を吐いて）『生涯の中には笑はずに居られないことがありますわ、また随分笑ふことが唯一の救になることもありませう、妾はさう云ふ一つの例をお話しませうよ、丁度妾達が兒供や、荷物と一緒に露西亞を發つた時のことですよ……それは妾には随分辛い時でした、汽車の切符だけはやつと買ひましたけれども——お金はもうそれ限りだったのです、處が、何う云ふ譯だか今になつても解らないのですが——私は汽車の切符を無くして了つたのです、それまで妾は物を無くした事などは一度も無つただけけれど、

それなのに……』

ジトフ『それは何處でした、露西亞でしたか』

主人の妻『露西亞に居たのならまだよう御座いましたが、もう國境を越えて居たのですわ、妾達は奥大利の或る停車場で、子供や、荷物や、枕拵と一緒に休んで居たのです……すると、妾、ひよいと枕に眼が着くと、——妾は腹を抱へて笑ひ出したのですわ、ほんとうに妾は、それを思ひ出す度にいつでも笑ひ度くなるのです』

ジトフ『奥さん、僕はこれ迄はつきりと解らなかつたのですがセルゲイ・ニコ

ライ井ツチ先生は何うして露西亞から追放されたのですか、それを聞かして下さいませんか』

主人の妻 追放されたのぢやありませんわ、主人は自分で國を出たのですわ、主人は上役と意見の衝突をしたのです、其人達が何かよくない書類に署名を

させやうとしたのを主人が拒絶して、其上その事の真相を大臣に申し立てたのです、え、それから妾達はそんなにし國を出て参りました、そして此處に或人が天文臺を建て、下さいました——それから十二年の間、妾達は此山の上に住んで居ります』

ジトフ『ではもし歸らうとお思ひなら、先生は歸ることが出来るのですな』

主人の妻『何うして歸るのですか、露西亞には憊んな天文臺が一つも無いことを貴方も御存じぢやありませんか』

ジトフ『でも白樺があるぢやありませんか』

主人の妻『まあ、馬鹿々々しい！一寸つと、誰か叩いて居るやうですれ』

(吹雪の咆哮)

ジトフ『唯、そんな氣がしたのでせう』

主人の妻『でも……ミンナや、誰か來てるか何うだか見て來てお呉れ、あの鐘

の音が妾の魂を拷問に掛けるやうだわ、始終誰か往つたり來つたりしてゐるやうに思はれるのよ、ほら、お聞きなさい？』

(吹雪の咆哮、鐘の聲)

ジトフ『三月の暴風はいつでも憊んなにひどいのです、猶にはもう春が來て居るのです——それなのに此處は眞冬ですからね、もう巴旦杏の花は咲いて了つたでせう』

ミンナ(下女)『誰も参りません』

主人の妻『一體何うなつたんでせう！一體何うなつたんでせう！妾はコレ

ニカのことが一番心配になりますわ、あの兒はどんなことにも遠慮しない男です、それから、鐵砲だらうが、大砲だらうが、恐がらないんですからね——、そんな物ばあの兒には何でもないのですわ、あゝ妾はとても考へては居られない、何か一言でも消息があればい——に——だけど、此四日以來と云ふもの

は宛然お墓の中へ埋められて居るやうですわ」

ジトフ「え、え、大丈夫です、直ちに判るでせう、晴雨計はもう上つて居るんですから」

主人の妻「それもあの兒が自分の國の爲に戦つて居るんならまだしもですけれど、外國人や外國の爲に戦つて居るのですからねえ——それがあの兒には何の關係も無いことですもの！」

次男（熱して）「兄さんは志士ですもの、あの人は壓制されてる者の爲なら、誰の爲にでも働くのです、何の人にも平等なのです、その人が何處の國の人であつても、兄さんには平等なんです」

ルンツ「外國人！ 國！ 政府！ 僕はそんな物が解らない、外國人とは何んだ、政府とは何んだ、かう云ふ區別が奴隷と云ふものを作るのだ、或る一軒の家に盜賊が這入つても、他の家では平氣で坐つて居るのだ、或る一軒の家

に殺人があつても、外の家では「自分達には没交渉だ」などと云つて居る、同國だと！ 外國人だと！ 僕は猶太人だ、僕には自分の國と云ふものはないんだ、ちや僕は何人に對しても外國人なのか、いや、いや、僕は誰に對しても同國人なのだ、さうだ、(室内を往來す) さうだとも！」

次男「さうだとも、此地球上に區劃を作ると云ふことが馬鹿氣きつたことだ」

ルンツ（往來し乍ら）「さうだ、いつでも僕はかう云ふ言葉を聞く、同國人！ 外國人！ 黒人！ 猶太人！ などと云ふ言葉を」

主人の妻「貴方はまたそんな邪みを出しましたね、お慎みなさいよ、何か妾がお氣に障つたことでも言ひましたか、妾はコオレンカが悪いことでもして居るのだと言ひましたか、妾は恚う言つてあの兒を出してやつたのですさあ急いで行つてお出で、悴や、此處に居ては唯氣が揉める許りだから」と、ほんとうに——コリヤの爲には何も悪いことはしませんでしたよ、妾は胸に置

き餘つた苦みを口に出した丈ですわ、此全一週間と云ふものは、妾は慥んな心配をして来たのですわ、慥んな心配を……貴下方は夜寝られても、妾はまんぢりともしたことはありません、いつでも耳を立て、聞いて居るのですわ、けれども、吹雪と鐘の音、鐘の音と吹雪の音許りですわ、誰だか泣いてるやうな、墓場で歎いて居るやうな——あ、妾はもうコリユシユカに逢ふことは出来ないんどせう、(註を翻しくいひたるものとせば何々ちゃん、といふが如きもの)

(吹雪、鐘の音)

次男(優しく)「ねえ、阿母さん、御安心なさいまし、皆なうまく行きますから、それに兄さん御一人ぢやなし……兄さんの身體に何事が起らなきやならんと決つた理由はないのですから、御安心なさい」

ジトフ「心配は御無用です、マルシヤさんも、アンナさん御夫婦も御一緒なんですから、あの方達が屹度ニコライ君に氣を付けるでせう、それに、——あ

の方は誰にでも可愛がられる方ですから——今頃は將軍のやうに従者が付いて居るでせうから、あの人を無暗な目に遭はすやうなことはありませんよ」
主人の妻「え、それは妾も承知して居ります、承知して居ります、けれども矢張心配ですわ、それにあのマルシヤのことは言はないで下さいまし、アンナは落着いた女ですけれども、あのマルシヤは——あのマルシヤは誰れよりも先に飛び出す娘ですから、妾はあの娘の氣性はよく知つて居ります」
次男「ぢや阿母さん、貴方は何うしろと云ふんですか、マルシヤに隠れてでも居ると言ふんですか」

主人の妻「またそんな事を言ふ！ 若し戦がしたければしたら可いぢやないか、妾がそれに何か言つた事があるかね、唯、隠さないで何でも話してお呉れよ、妾だつて知つてる丈の事は知つてるんだから、決して子供ぢやないんだから、これで妾も若い時には自分で狼と闘つたことさへあるんだから、え、何うだ

い！」

ジトフ「狼と！ 貴女にでもそんなことが出来ますか、——こりや意外だ、何うしてそんなことをなすつたんです」

主人の妻「いゝえ、くだらない事です、妾がある冬の晩方、一人で馬に乗つてぶら／＼して居る時に、不意に狼が襲ふて来たのです、妾は銃で狼を追拂つたんです、それ以來は、いつでも其事を思ふと腹が立つてなりません」

ジトフ「貴女でも銃が打てるのですか」

主人の妻「ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、恁んな生活をしてるものは、何んでも知つて居ります、妾はセルゲー・ニコラエ井ツチ（良人）とトルキスタンへ一緒に探険に出掛けたこともあり、其時などは、千五百基 米から男乗りの鞍で乗り通しました、それ許ぢやありませんよ、ある時などは妾、溺死する處でした、また二度も焼け死なうと仕たこともありましたが……（小聲

で）けれどもワシリ・ワシリエウ井ツチさん、世の中で一番恐ろしい事と言つたら子供の病氣より恐ろしいことはありませんよ、探険旅行中に一度コリュシユカが喉に激衝を起した事がありましたの、だけど初めの中はデアリテリヤだと思つて居りました、其時の心配と云つたらありませんでした、お醫者もなければ、薬もありません、一番近い人里だつて五十基 米から以上も離れて居るんですから、妾は天幕から駆け出した時に地上へ打ち倒れて了ひました……考へる丈でも恐ろしい御座いますわ、御存じの通り、妾は二人も子供を失くして居るのです、サアセンカと云ふ一人の方は七歳の時に亡くなりました、もう一人のはまだ赤坊でした。それからアンナも子供の時に一度死にかけたことがあります。だけどもあ、どうして恁んな話を仕出したんでせう……ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、母親と云ふものはほんとうに辛い運命を擔つて居るでんすわねえ、でもお蔭さまで子供達が皆な立派に育つて呉

れて何よりで御座います』

ジトフ『爾ですとも、ニコライ君などは實に驚歎すべき立派な人物ですからな』

主人の妻『え、コオリヤですか、え、妾も随分澤山な人に逢ひましたけれども、あんな品格の高い男に逢つたことはありません、妾は先刻——外國の爲に戦ふと言ひましたが、言はず、あれは妾の利己主義からですから、コオリヤは其とは反對で、あの兒は獅子が蟻の巢へ近いて居るのを見ても唯一人で武器も持たずに獅子に飛びかゝつて行くやうな男です、ほんとうにあの兒はそんな男です、今頃は何うして居るんでせうね』

ジトフ『僕が濠洲へ行かうと思はなければ……』

ポラアク『入り来る』奥さん、黒い珈琲を一杯頂けないでせうか』
主人の妻『え、差上げますとも、ミンナ！』去る』

ジトフ『何うだい君、仕事は進んだかね』

ポラアク『有難う、で君は——、何故君は何もしないで居るんだ』

ジトフ『恚んな天氣だもの——、仕事なんかどうして出来るものか、それに

——今度の事件が……』

ポラアク『いや、露西亞的怠惰ぢやないのかね』

ジトフ『怠惰かもしれない、けれども誰が知るものかね』

ポラアク『それはよくないね、君、ルンツ君、君は先生が君にお頼みになつた

計算をやつたかね』

ルンツ『慳食に』い、や』

ポラアク『益々よくないね』

ルンツ『よくつても悪くつても、それは君に關係したことぢやないよ、君は僕と同じやうに助手ぢやないか、君には僕を叱るやうな権利はないよ、あるも

のツ』

ボラアク（肩を聳やかして後に向け）『ジトフ君、君、珈琲を持って来て呉れるやうにさう言つて呉れ給へ』

ジトフ『あゝいゝよ、先生は、今、何んな仕事をして在しやるんだ、僕は近來接觸する機会を失つて了つた』

ボラアク『ウム、何か今非常に大きな仕事をして居られるよ、僕は随分忍耐して仕事をして居るけれども、ニコラエ井ツチ先生の忍耐と、勝れた頭腦の力には、唯驚嘆する許りだ、實に驚くべき頭腦だよ、何等の摩擦も受けやしない、宛然僕等の使つてる器械のやうだ、あの方は時計のやうに規律正しく働いて居られる、此三十年間に於ける先生の計算に只の二つだつて間違はありやしない、それは僕が保證するよ』

ルンツ（聞き居たるが）『先生は唯の勤勉家ぢやない、先生は一箇の天才だ』

ボラアク『さうだとも、先生のお書きになつた數字と計算は兵卒のやうに生きて歩き出すよ』

ルンツ『君は何事でも規律と云ふ方へ持つて来て了ふ、愚劣な規律屋だ』

ボラアク『規律がなければ勝利はないのだよルンツ君』

ジトフ『さうだとも』

ルンツ『僕は君達よりも先生を更によく理解して居るよ、先生は、丁度僕等が此處で壁を見るやうに「永遠」と云ふものを見て居られると思つて居る。確かに！』

ボラアク『それには異議はない、だが君、革命は済んだとも済まないとも、ただ何の知らせも無いのかね』

ジトフ『何うして知らせなどがあるものか、まああの外の荒れて居る音を聞き給へ』

ポラアク『ウム——僕は此天氣のことに気が付かなかつた』
次男『最近の新聞に依ると……』

ポラアク『いや、いや、僕はいつお了ひになるか、それ丈聞けば可いのです、
委しいことは聞き度はありません』

主人の妻『入り来る』誰も来ちや居ないわ、妾は自分で外で見て来けれど——
矢張り無人の境だわ』

ポラアク『どうか奥さん、珈琲を持って来さして下さいませ』

主人の妻『え、よう御座います、貴方はお仕事をして在しやい、仕事をしてる

ことは幸福な事ですわ』(ポラアク去る)

次男『だけど僕は、仕事をして居ることが不名譽な場合もあると思ふ』

主人の妻『まあ、何を云ふの、ペエチャー！』

次男『さうに違ひないんですもの、何故阿母さん、貴方は僕を遣つて呉れな

つたんですか、僕は恚んな穴の中に居ると気が狂つて了ひます』

主人の妻『まあ、ペテチユカ、お前はまだ十八にもならないのぢやないか』

次男『ニコライ兄さんは、十九の時にもう牢に入つて居ますよ』

主人の妻『お前、それがいゝことなのかい』

次男『兄さんは、事業をしたのです』

主人の妻『ぢやお前阿父様にお話しお仕よ、阿父様が可いと仰しやれば、妾も
いゝから——』

次男『阿父様は行くと仰しやいましたよ』

ジトフ『ぢや君は何うして行かないのだ』

次男『何うして行けないのか僕には解らぬ、あそこではあんなひどい戦争があ

るのに僕は……僕は行けないのだ……』(去る)

ルンツ『ペエチャは大變神経が過敏になつて居ます、奥様氣を付けて遣らなく

ちやいけませんよ」(ヘエチヤの後を追ふ)

主人の妻「妾、何うしたらいゝのでせう、ほんとうに困りましたわ」

ジトフ「なあに、何でもありませんよ、直きに癒りますよ」

主人の妻「あの子は宛然女の兒のやうに弱い兒ですもの——あの兒の思ふやうにさせられるものですか、あの兒は此頃恐りつぽくなつて了ひましたわ、其處へルンツさんがお出でになつてあの兒を宥めて下さればいゝのに、却つてあの方は……」

ジトフ「ルンツ君自身が此頃ぢやヒステリーになりかけて居るんだから」

主人の妻「妾にもさう思はれます、けれども有難いことにはワシリ・ワリシエ

ウ井ツチさん、貴方丈が平氣で入らつしやるから助かりますわ、でもなければお墓の中へでも入つて了はなきやなりませんわ」

ジトフ「僕はそんなにするより外はないのです、僕はいつでも落ち付いて居り

ます、恁んなのが僕の性質なんですから、僕は今迄にも度々激して見やうと思つたこともありましたが、どうも僕には出来ないのです」

主人の妻「結構な性質ですわ」

ジトフ「何うですかね、兎に角氣樂な性格です、だけど困りましたね、新聞の

來ないのには、僕は人の激して居る記事を読むのは好きなんですから」

主人の妻「貴方は御存じですか、あの四年前に、ルンツさんがまだ外國で勉強して在した時分に御両親が殺されて了ひなすつた事を、あの猶太人虐殺のあつた時に」

ジトフ「え、知つて居ります、さう云ふことを聞きました」

主人の妻「あの方は自分では決して其事をお話しなさいませんが、堪らないのでせうよ、可哀さうな人ですれ——妾はあの人の顔を見ると涙がこぼれます。おや、また叩いて居ます！」

ジトフ『いゝえ』

主人の妻『二年前の恁んなお天氣に一人の行商人が家へ轉げ込んで来たこと
がありますわ、死にかゝつて居ましたけれど、息を吹き返すと直ぐと商賣を
始め出しました』

ジトフ『僕も行商をしながら濠洲へ行かうと思ひます』

主人の妻『貴方は英語がお出来なさらないぢやありませんか』

ジトフ『少しは出来ます、カリフォルニアで習つたのです』

主人の妻『もう一遍新聞を読みますか、外には何にも考へる氣にもなりませ

んわ、貴方もお読みなさい、ワシリ・ワシリエウ井ツチさん』

ジトフ『僕は読み度くありません、僕は少し暖爐の傍に行つて居りませう』

(主人の妻は眼鏡を掛けて新聞をめくる、ジトフは暖爐の傍に坐る、ポラア
クは働けり。暴風。鐘の音)

主人の妻『一體主人は何をして居るんでせうか、妾はもう二日も逢はないんで
すわ、主人は書齋で食事をして居ます、唯も来ちやならないと言ひ付けまし
た』

ジトフ『ふむ、——さうですか』(問)

主人の妻(讀み乍ら)『まあ恐ろしい! 一體機關銃で何んな物でせう』

ジトフ『鐵砲の一種でせうよ』

(問。ミンナ珈琲をポラアクの室に持ち行く)

主人の妻『其機關銃で打つて見度いものですね』

ジトフ『え、それは危険なものでせう』(問)

主人の妻『まあ、ひどい音ですね、讀めやしませんわ、ワシリ・ワシリエウ井ツ
チさん、若し貴方が濠洲へ行つてお了ひになると淋しくなりますわ、貴
方は何うしても行き度いのですか』

ジトフ『え、何うしても行かないやなりません、僕は一ツ所には尻が落ちつかないんですから、奥さん、僕は、世界中を歩いて見て世界がどんなにして出来て居るか見度いのです、僕は濠洲から印度へ行きます、僕はまだ歩いてる虎を見た事がないんですから』

主人の妻『其虎を見て何うするのですか』

ジトフ『それは僕も分りません、奥さん僕は物を見るのが好きなんです——僕は見ると面白いです。僕の村に小山がありました、僕が子供の時に、一日坐つては唯見て居りました、僕が天文学を始めたのも、見度いが爲だったのです。計算は嫌ひです——二十萬哩でも、三十萬哩でも同じやうなものぢやありませんか。僕はまた話をするともあまり好きぢやありません』

主人の妻『それぢや、妾、黙つて居りますから、貴方は眺めて在らっしゃいますし』

(間。暴風。鐘の音)

ジトフ (振り向きして) 『奥さん、貴女は先生と一緒に加奈陀へ旅行なさるのですか、日蝕を見る爲めに』

主人の妻『え？ 加奈陀へ？ え、行きますとも、主人は妾を連れずによろ行きませぬわ』

ジトフ『随分酷い旅行ですよ、道も遠いし』

主人の妻『何に、何んでもありませんわ、唯、今度の事さへ終結がつけば、あゝあゝ——其を考へても恐ろしい御座います』

(沈黙。暴風。鐘の音)

主人の妻『ワシリ・ワシリエウ井ツチさん』

ジトフ『何ですか』

主人の妻『何もお聞になりませんか』

ジトフ『いゝえ』
主人の妻『ぢや又氣の所爲でしたか』

(間)

主人の妻『ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、何か聞えたでせう』

ジトフ『何がですか』

主人の妻『鐵砲の音がしたでせう』

ジトフ『こんな處で、鐵砲の音なんかするものですか、それは單純な幻覺ですよ』

主人の妻『けれども、はつきりと聞えたんですもの』

(間。遙かに銃聲聞ゆ)

ジトフ『成程！ 打つてますね！』

主人の妻(急ぎ出で行く)『ミンナ！ ミンナ！ フランツや！ フランツ

やー！

(ジトフ徐ろに身を起す、第二の銃聲稍近く聲ゆ、ハエチヤとルシツ急ぎ室を過ぎ行く)

次男『何だらう』

ルシツ『分らない、行つて見やうよ』

(ジトフは窓に立ちて耳を澄ます、ポラークは頭を振り向けて空しき室を眺め居たるが聽て又仕事を續ける、何處かにて戸を閉める音、犬の鳴き聲)

主人の妻(入り來り)『妾はウルカン(犬の名)を附けて人を遣りました、屹度

誰か道を迷た者があるのでせう』

ジトフ『だが鐘が鳴つてるぢやありませんか』

主人の妻『風が此方へ吹いて居るから、あんなにはつきり鐵砲の音が聞えたのですもの』

ボラアク（入り来る）『何でも御用があるなら致しませう』
主人の妻『まだありませんわ、兎に角、熱い飲物を何か拵へませう』

（再び戸を閉める音、人の話聲聞ゆ、人々に連れられ身を包み雪だらけになつてアンナ（長女）とトライチュユ入り来る、兩人はウエルチヨフチエフを擔ぎむ）

主人の妻（闕の上に立つ）『何うおしなの、アンナ？』

アンナ（肩掛を取つて）『母様、急いで何か暖かい物を！』

（妻は死にさうなのです、妾、ワアレンチン（夫）が凍え死にやしないかと心配して居ります、さ、大急ぎでして頂戴』

（半ば氣絶して椅子の上に沈む）

主人の妻（擔ぎ込まれたる人の傍に急ぎ駆け寄り）『ワアレンチン、ワアレンチン、何うおしなの』

トライチュユ『負傷をなすつたのです』

長女の夫（弱々しげに）『阿母さん、心配しないで下さい、大した事はないのです……足を……』

主人の妻（トライチュユを指し乍ら）『此人は何方だい』

トライチュユ（労働者）『友人です』

主人の妻（恐ろしげに四方を見廻はし）『そしてコオリヤは？』

（問。次男ハエチャは涙を溜めて母に縋り寄り）

次男『阿母さん、阿母さん、何うもなつたんぢやないんです、心配しないがい、何うもなつたんぢやないから』

主人の妻（静かに次男を押し除け稍々落着きて）『そして、コオリヤは何處に居るのだい』

アンナ（正氣付きて自ら負傷せる夫の世話をなす）『母様、心配なさいませう、

兄さんは今牢の中に居るんですよ』

ルツン『何ですつて、一寸お待ちなさい……僕には何うも分らない、何うなつたのですつて?』

主人の妻『牢屋に、何んな牢屋に?』

アンナ『ほんとうに——何が分らないのです。妾達は逃げて來ましたのよ、唯それ丈だわ、此處へ隠して貰はうと思つて』

ポラアク『ぢや、革命は済んだのですか?』

ルツン『だが僕には分らない……ほんとうかしら』

トライチュ『さうです、我々は敗北したのです』(間)

アンナ『母様、何か暖かいもの持つて來て下さいまし、お湯か、コニヤクか……』

……綿はありませんか?』

主人の妻『皆持つて來るよ、ミンナや(出でんとして)ほんとうに牢屋へ!……』

ジトフ『先生を呼ばなくちやいけない』

主人の妻『呼びに遣りませう』

ポラアク『何うなつたのか、どうか一切を話して呉れ給へ……君、お名前は何とか言ひましたね……』

トライチュ『私はトライチュと云ひます』

長女の夫(弱々しげに)『トライチュ君が居なかつたら僕は死んで居たらう、アンナ、心配しなくつてもいい、僕はもう樂になつたよ』

アンナ『何うして此處まで來られたのか——妾には分らないわ、ほんとうに恐わかつたわ、八時から妾達は一日山の上に居たんですわ、終日。國境ではもう少して捉まる所でした』

ルツン『何うも僕にはまだ信じられない……』

次男『ソリヤ何うしました、苦しいですか?』

長女の夫『あゝ、足をやられたんだ……爆裂弾の破片で、頭へも少し受けたや

うだ、なあに、これんばかりのこと』

ルンツ『奴等は散弾で打つたのですか』

長女の夫『紳士閣の奴め却々うまく……却々うまく防禦したよ』

アンナ『リアレンチン、貴方、話をしちやいけないわ、ほんとうに恐かつたの

れ、爆裂弾が味方の人達をバラ／＼にして丁つたのどもの、死んだ人は千も

萬もあつたでせう、妾、議事堂に死人の山を築いて居るのを見ましたわ』

主人の妻（進み寄り）『そしてコオリヤは？ コオリヤのことを話してお呉れよ』

アンナ『ほんとうは何處に兄さんが居るのか妾も知らないのです』

主人の妻『だつて今、お前言つたぢやないか……』

次男『マルシヤも居ないぢやありませんか、姉さん、貴女何か隠して居ますね、

ルンツ君、君はあんなことを言つたけれども……』

ルンツ『ハエチヤ、僕は恚にならうとは思はなかつた、何うも信じられない』

アンナ『妾達は隠やうなことは持つて居やしませんわ』

トライチュ『テルノウスキイの奥さん、御安心なさいまし、私はニコライ君が

生きて在らつしやると確信して居ります』

アンナ『トライチュさんが一切のことをお話しなさるでせう、此方は兄さんと

一緒にバリカーデに居たのですから』

ドライチュ『バリカーデが軍隊の手に落ちやうとした最後の瞬間にニコライさ

んは負傷なすつたのです、ニコライさんは私と並んで立つて居られました、

私はあの方が倒れるのを見たのです』

主人の妻『まあ！ 傷は重かつたのでせうか、死にやしませんでしたか、どう

ぞ話して下さいまし』

トライチュ『傷は重くは無かつたやうです』

下男「先生が直ぐと在しやるやうに仰しやいました」

アンナ「あゝ、いと、急ぐことはないんだから」

主人の妻「さあ、もつと話して下さい」

トライチュ「妾の思ふには弾丸が霰弾が肩に中つたやうでした、初めの間はしつかりして居りましたが聴て氣絶せられました、私はニコライ君を或る横道へ擔き込んだのです、けれどもそこで龍騎兵の分隊と衝突したのです、とても抵抗は出来ないからニコライさんを危険の中に棄て、来るより外に仕方はなかつたのです、そして私は氣絶して居られるニコライ君を敵の手に残して自分は味方の方へ引き上げたのです、多分今頃は牢の中に入れられて居られるでせう」

主人の妻（泣く）「あゝ、あゝ、コリュシユカ！ コリュシユカ！ 妾達は此處に坐つて何にも知らなかつたけれども虫が知らしたんだわ！ それで命には

別條ありませんでしか貴下？ 如何ですか」

トライチュ「別條はないと居ります」

次男「それからマルシヤは何うしたのです、何故マルシヤの話をしないのですか、死んだのですか？」

アンナ「いゝえ、死ぬもんか、ワアリヤ、コニヤクに水を入れて上げませうか」

トライチュ「私達はマルシヤさんをちらと見ましたが、あの方はニコライ君の仲間を探す爲に後へお残りになりました」

主人の妻「あゝ、マルシヤ！ ほんとうに強い娘だ！ よくしてお呉れだつた、ほんとうに偉い娘ぢやないか、それから貴方——何とか仰やいましたね——あゝトライチュさん——貴方もコニヤクをお呑みになりませんか、貴方は疲れて在しやるやうだ、さあ、お呑みなさいまし。妾、接吻をして上げ度いのですけれども、貴方のお仲間では、そんな習慣はないやうですから」

トライチユ『いえ、私はそれを大變名譽に思ひます』(兩人接吻す)
主人の妻『あゝ、マルシヤヤ！ マルシヤヤ！ そして又、此のトライチユさん……ミンナヤ』(去る)

ルンツ(物狂はしき様にて)『ぢや皆な徒勞になつたのだな』
ボラアク『さうに違ひない……』

ルンツ『凡ての血も、千百の犠牲も此の未曾有の戦ひに此……此……あゝ畜生！ 畜生！ 僕はどうして此處に居たのだらう、何うして其處へ行つて自分の同胞と共に倒れなかつたんだらうか』

長女の夫『ぢや……君は、恐らく紳士閣が地上の主權を急に擲つて了ふだらうと思つて居るのだらう……紳士閣は……決して馬鹿ぢやない、君が自分の身を危険に曝すやうな機會はまだあるよ』

トライチユ『戦争はまだお了ひになつたのぢやありません』

ボラアク『トライチユ君、君は労働者ですか』

トライチユ『はい、私は労働者です、それはさうと詰らない心配をおさせ申す必要もないと思ひましたからテルノウスキイの奥さんには申し上げませんでしたがニコライ君は銃殺されたでせう』
次男『銃殺！』

トライチユ『私達が此處に参ります時、私はかう云ふ噂を聞きました、それは凡ての捕虜は理由なしに銃殺して了ふのだと云ふ噂を。又負傷者でも』
次男(戦慄して、手で顔を蔽ふ)『それは酷い！』

ルンツ『野獸のやうだ、奴等は人間の血を吸ふて生きて居るのだ、奴等は人間の血で満腹して居るのだ』

長女の夫『さうだ……奴等は決して菜食主義者ぢやないんだ』
ルンツ『君は冗談を言つてゐるんですか』

アンナ「ワリヤ、貴方は、何も言はないで在らつしやい」

長女の夫「此皮剥けになつた……足が俺をこんなに暢氣にするのだ、ぢや、俺は黙つて居らうよ、アンナ……俺は疲れて了つた、俺は唯、俺達の天文學者（父の事）が……何んな顔をして居るか其が一遍見度いんだ」

トライチュ「静に！（主人の妻入り来る）戦争をしてる時に敵に對して戦争の規約を定めることは出来ませんかられ」

ジトフ「先生がお出でになつた」

（階段の上に主人テルノウスキイ現はる、彼は階段を下り乍ら軽く言ふ）

主人（テルノウスキイ）「何うしたニコライは何處に居る」

主人の妻「阿父さん、吃驚してはいけません、ニコライは負傷して牢に入つて居るんです」

主人（立ち止りて上より下に向ひて言ふ）「まだ人間は殺し合つて居るのか、ま

だ牢屋など、云ふものがあるのか」

長女の夫（悪意ある様にて）「ふん……先生天から落ちて來たな」

第二幕

山中に於ける朗かなる春の朝、空には雲もなく日光満ち溢る、背景の右手に、高き塔を有する天文臺の一角見ゆ。中央の庭には、寺院に於けるが如きアスファルトの道附けられたり。庭は凹凸にして、舞臺の背後に續く、其處には、門を有する低き石塀あり。其背後に山脈見ゆ、されど其山は、何れも天文臺の建てる山よりは高からず、左手、前面に近く、崖に臨み、石のヴェランダを有する住居の一角見ゆ。植物らしきもの一ツもなし。第一幕と第二幕の間に、二週間經過せり。車椅子に乗れる長女の夫、ウエルチヨフチェフを、ア

アンナは彼方此方と動かせり、ジトフは壁の側に座り、日向ぼつこを爲す、ジトフのみ一人上着を着たる外は、何れも春着を着けたり。

ジトフ（坐つて）「アンナさん、僕に車を押させませんか」

アンナ「否え、貴方は其處に坐つて在つしやいまし、妾は何人にもお世話をかけ度くないのですから、ワリーや、氣持は可いのですか」

長女の夫「うむ、——だが何故、俺は係締に罹つた鼠のやうに、恁んなにぐるぐる廻つて居なきやならないんだらう。俺をヂトフ君の傍へやつて呉れ、俺も太陽からエネルギーを取り度いから……ウム、これで可し、ああ良い氣持だ」

アンナ「ジトフさん、貴方は何故仕事をなさらないんですか」

ジトフ「恁んなお天氣ですもの！ 春が笑ひ出すと、僕はもう部屋の中に靜として居られません、先づ僕は、よく日向にあたつて、それから……」

長女の夫「ジトフ君、君は土耳其人ぢやないかね」

ジトフ「否や、爾うぢやありません」

長女の夫「爾うやつて、其處に坐つて、臍を覗いて居る所は、土耳其人その儘だぜ、君」

ジトフ「いゝや、僕は土耳其人ぢやありません」

長女の夫「僕には君の氣持がよく解る、爾うやつて日向ぼつこをするのは良いものだ、けれどもニコライは實に可愛相だ、此の満足を得る事が出来ないだから、僕はスタアンブルクの監獄によく知つて居るが、彼處は太陽の光線などは入つて來やあ仕ない、空を見ることさへも出來あ仕ない、僕は一月許り入つて居たが、濕氣のために宛然濕布されたやうになつた。實に恐ろしい所だ」

アンナ「でも、兎に角、生きて居て呉れば結構ですわ、屹度妾は銃殺せられて

了ふだらうと思ひますわ』

長女の夫『だが、お待ち、未だ判りや仕ない、マルシヤを起して、早く話を聞かうぢやないか』

ジトフ『あの女は昨夜遅く着いたのですな』

長女の夫『僕はマルシヤの来たのを知つて居た。マルシヤは歌を唱つて家中のものを起して了つた、僕は驚いたよ、恁んな靈廟のやうな所で、誰が歌を唱つて居るんだと思つて！僕は又ボラク君が新しい星でも発見したのかと思つた』

ジトフ『マルシヤの歌ふ時は、屹度良い事があるんだ』

アンナ『皆んな寝て居る時に、よく歌なぞ歌へると思つて、呆れるわ』

主人の妻（ヴェランダの上に姿を現す）『ルンツさんは居ませんか』

アンナ『いゝえ』

主人の妻『本統に何うしたんでせう。セルゲイ・ニコラエ井ツチがあの人を尋

ねて居るのです、——何う言つたら可いだらうか。羊のやうに皆な散ばつて、

仕事を仕て居るのはボラクさん一人ぢやないか、それから妾達のあのマル

セチユカ——、あの娘は昨夜歌を歌つたんだよ、妾はあれを聞いて居る間、

嬉しくつて息が塞り相だつたよ……ほんとうに、それを思つても……』

長女の夫『阿母さん、マルシヤを起して下さい』

主人の妻『否え、不可いよ、妾、起すまいと思つてるの、寢させてやる方が可

い、夕方までも』

長女の夫『ぢやストルツ君を起して下さい』

主人の妻『ストルツさんも起されないう、あの人も旅で疲れて居るんだから、そ

れに、あんな良い報知を持って来て呉れたんだから——、起してなるものか！

それから、ルンツさんが歸てお在だつたら、直ぐと寄越してお呉れよ、（行き

かけて戸口に立ち止り)ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、暖かいことねえ、宛然
露西亞に居る様ですわ、妾は箱へ泥をつめて、大根の種を播て置きました、
大きくなつたら、誰れか食べるものがありませう(去る)
長女の夫『實に精力家の婆さんだね、大根の種か、は、は、は(間)』
アンナ『ジトフさん、貴下が那樣に前の方を見つめて在つしやるのは、何か考
へて在しやるんですか』

ジトフ『否え、考へては居りません、唯だ見て居るきりです』

長女の夫『馬鹿な！人間が考へずに居られるものか——、なア、君が何か考
へて居ないのならば、何か思ひ出して居るに相違ない』

ジトフ『何にも思ひ出すこともありません、併し……紐音は良かったです、
僕は一番賑かな通りの旅館に泊つて居ましたが、……うむバルコンもありま
したよ……』

長女の夫『うむ、それで……』

ジトフ『そりや、全くよかつたですよ、バルコンに坐つて、歩いてる人や、馬
車に乗つてる人を見て居ました。高架鐵道も……いや大變面白かつたです』
アンナ『亞米利加人は餘程開化んで居ますか』

ジトフ『いや、那樣ことは考へませんでした、唯だ一般で、面白かつたのです、
(間)だがルンツ君は何處へ行つたんでせう』

アンナ『昨夜、トライイチ君と山へ行きましたわ』

長女の夫『調査に行つたのだ』

ジトフ『調査に?』

長女の夫『トライイチ君は、何時でも何か調査して居るんだ、あの男はもう吾々
のウラニヤ寺院を調査して、あの寺が優れた武器庫になる事を發見した。今
度山を調査に行つたのも多分武器製造所に適當な場所を見つけに行つたんだ』

らう』

アンナ『トライイチエさんは空想家ですわねえ』

長女の夫『いや、爾う許りでもない、あの男の空想は獨特だからな、往々狂氣
じみたやうに思はれることもあるが——、又實現される場合もある、實に注
目すべき人物だ、あの男は、餘り言は言はないが、然しあの男ほど革命運動
を諒解して居るものはないんだからな。君等、天文學者の言語を借りて言へ
ば——あの男は、月を太陽程に光らすことの出来る男だ。ニコライはあの男
を一體何處で得たのだらう？』

次男（家より出て来る）『お早う』

長女の夫『おい、ペーテルヘン、何うしてお前は那樣に不機嫌な顔をして居る
んだ』

次男『さうですか……』

アンナ『お前はニコライ兄さんが監獄に入つて居るを知つて居るの？』

次男『かあさんから聞いて知つて居るよ』

アンナ『お前は何うして那樣澁い顔をして居るの、酸でも飲まされたやうぢや
ないか、——みつともないよ』

次男『ぢや、見ないで下さい』

ジトフ『ペエチャ、僕と一緒にオウストラリヤへ行かないかね』

次男『何のために——』

アンナ『お前は何時でも、小兒のやうに——何のためにだとか、何うしてだと
聞くけれど、昨日も山へ連れて行かうとしたら——、又何んのためとお尋き
だつた、ぢや、御前何のために御飯を食てるの？』

次男『僕は知らない、打棄つといってお呉れ、姉さん』

長女の夫『那樣失禮な事を言ものぢやない、ペエチャ、——ヤア、やつて来た

な！(トライチユとルンツ泥まみれにて歸る)おゝルンツ君、天文学者が君を尋ねて居るよ。氣をつけ給へ、帽子に何かついてるよ』

ルンツ『勝手に探させたらいゝさ……や、御免なさいアンナさん』

アンナ『構ふことはないわ、妾は優しい娘ぢやないんだもの、貴方の思つてる通りを仰しやい』

次男『そんな亂暴な！』

長女の夫『トライチユ君、何うだね、何處か見付たかね』

トライチユ『此邊は悪くはありませんな』

アンナ『貴方は御存じですか、昨晚マルシヤの歸つて來たことを』

トライチユ(一歩前に進み)『ほんとうですか、そしてニコライさんは？』

長女の夫『銃殺されたよ、絞殺されたよ、輪裂にされたよ』

アンナ『いゝえ、まだ生きて居りますよ、生きて居りますよ』

(窓の後ろに樂の音とマルシヤの歌聞ゆ)

マルシヤ『牢獄の内に囚へられ、悶えて我は此處にあり、——一羽の鷺は籠の中、我と同じく囚はれぬ』

トライチユ『ぢや牢屋に居るのですか、助かつたのですか』

マルシヤ『鷺は羽搏く、あはれ友は、——糧をし喜び、朗らに叫ぶ』

長女の夫(歌ふ)『食り食ひて、さて我を、いと嬉しげに眺めつゝ——、我と久しく、そが胸の、思ひを分つ如くなり——、招くが如く我を見て、さて朗らかに叫ぶなり——何を躊らふ我友と、我に言はんとするがごと』

マルシヤ(出で來る、後にストルツ從へり、熱して)『自由に生れし我等は、空高く翔飛ぶ——、山々の、霧立ちこむる彼方へと——、大海の、緑の波の輝く方へと——「嵐」と我等と唯二人、寂しく住める彼方へと——』

トライチユ『マルシヤですか』

アンナ「場所はずれの音楽會ですわね」
 主人の妻「涙を拭き乍ら後ろより入り来る」
 長女の夫「阿母さんがそんなに言ふと、丁度私の雛子よ、と言ふやうに聞えませよ」

主人の妻「妾には雛子なんだよ、お前は直ぐスロープにでももされさうに毛を拂り取られて居るんだらね」

マルシヤ「お早う御座います、アンナさん、(トライチュに) ニコライが貴方に宜敷くと言ひました」

トライチュ「急に手を以て眼を隠し直ぐまた手を離す」
 「有難う御座います」

マルシヤ「それから外の方にも——皆さんにも、それから御病人、貴方にも宜敷く」

長女の夫「貴婦はニコライに逢つたのね」

マルシヤ「歌ふ」
 「何を踏ふ我が友と」

ルンツ「いけませんよ、皆心配してゐるんですからね」

マルシヤ「妾はニコライに逢ひました、唯逢つた丈です、それから御紹介致しますわ、此方はストルツさん、實に傑い方ですわ、今は銀行に勤めて在しや

いますけれども、其中に革命運動に非常な仕事をなさるでせう、此方は大層

探偵に似て在しやるから、それが大層妾の役に立ちました……さあストルツ

さん、御挨拶をなさいまし」

ストルツ「致しますとも、皆さんお早う御座います」

マルシヤ「ペエチャ、何うしてそんなに恐しさうにして居るんです？」

長女の夫「マルシヤ、そんなに私達に氣を揉ませないで、早く話して聞かして

お呉れ」

マルシヤ「御病人さん、そんなに怒るものぢやありませんよ、今日のやうな日

に、怒るものがあるもんですか、あのね、——ニコライはスターンベルグの監獄に入つて居るんですよ』

一同『それは知つてるよ、それは知つてるよ』

マルシヤ『それで——銃殺されることになりました』

主人の妻『まあ——コオリヤが！』

マルシヤ『お母さん御安心なさいまし、そんな事にはなりやしませんから、妾はモリツ伯爵の娘ですもの、由緒ある家族で妾の親の領地も何處か向ふの方にある筈です、(空に手を振る)それに彼奴等は悪い奴ですけれども皆馬鹿ですから』

長女の夫『さうだ、さうだ』

マルシヤ『ニコライの居所を探すのは一番困難でした、彼奴等は捕虜の名前を隠して置いて、裁判もせずにさうつと始末を付て了ふつもりなんですから、

しがしストルツさんが助けに来て下さつたもんですから……ストルツさん、御挨拶をなさいませんか』

テルノウスキイ(主人)入り来る、彼は襪き外套を着、小さき毛皮の帽子を被れり、一同は恭しく、されど冷淡に挨拶す。

主人の妻『お父さん、マルシヤの話を聞きなさい、ニコライは銃殺されるんですつて』

マルシヤ『手短かに言へば、妾は脅かして見たり、哀願して見たり、歐羅巴の輿論と言ふことを話して見たり、學者としてのニコライのお父さんの地位を言つて見たりしたのです、——それで執行は猶豫されました、けれども妾も監獄へ入れられました』

長女の夫『それで、ニコライは今どうして居る？』

マルシヤ(顔を曇らし)『あの人は少し陰鬱になりました、けれどももう癒つて

「了つたでせう」
主人の妻「怪我はどうなの」

マルシヤ「それは言ふ程のことでもありませんわ、もう癒つて元氣になつて居りますわ、けれどもあの人の居る監獄と言つたら酷いのです、それは穴藏と言はうか、洞穴と言はうか、沼と言はうか——何ともかとも言ひやうのないところですわ」

長女の夫「僕は知つてるよ、前に入つて居たから」

マルシヤ「だけと妾が騒いだもんだから、彼奴等はニコライをもつといふ處へ入れとる約束しましたわ、それから阿父さん、ニコライが貴方によるしくと申しました、貴方の御仕事の成功を祈つて居りました、そして、どうして居らつしやるかと言つて……」

アンナ「そんな場合によくもそんなくだらぬ事が考へ出せたものだね」

主人「悴や、俺はお前に感謝するぞ」

アンナ「御丁寧だね」

ルンツ「それで、貴方は何うなつたのですか、何うして逃げて來られたのですか」

マルシヤ「兵隊が其同じ日に妾を捕まへたのです、けれども妾は店に居る病氣のお婆さんが妾を待つてると言つて、酷く、鳴いたり、わめいたりしたものですから、兵隊は許して呉れたのですわ、でも兵隊の一人が鐵砲の臺尻で妾を打ちましたわ……」

ルンツ「何て残酷な——」

マルシヤ「それでも妾は旗を着物の下に隠して居ました、妾達の旗を」

長女の夫「ウム、旗を持つて來たのか」

マルシヤ「妾は旗を止め針でしつかりと留めて來ましたの、でも重かつたわ、

随分重もかつたわ、妾は旗をやつと持て来ましたの——今ぢやストルツさんの下着になつて居るのよ、若しストルツさんがあんなに小さくなければ……」
 長女の夫「ぢや、ストルツさんが大きければよかつたらう、何故君は旗を持つて来なかつたんだ、僕は見たくつて仕やうがない……僕等の旗が！ それにしても忌々しいな！」

マルシヤ「いゝえ、もう一度戦争をするまであれば藏つて置ませう、ねえ、トライチユさん、誰が妾達の裏切りをしたか知つて居ますか？」

トライチユ「知つて居ます」

ストルツ「謀反をしたり裏切をした奴は死刑にして丁はなくちやいけません」

(マルシヤ笑ふ、トライチユも微笑す)

長女の夫「ストルツ君、君も却々血に渴してゐるね」

ストルツ「電氣で殺せば血は出ませんよ」

主人の妻「それでコリュシユカは何うなるのだい？」

マルシヤ「ニコライですか——誰か聞いてるものはありませんか、誰も居りませんか、召使などは居ませんか——ではよう御座いますわ、實はニコライは脱獄するのです」

トライチユ「では私も助けに行きませう」

マルシヤ「いゝえ、トライチユさん、貴方は此處に居て下さるやうに、コオリヤは言つて居りました、貴方はあんなに酷く搜索されてるのを御存じぢやありませんか？」

トライチユ「構ひませんよ」

マルシヤ「でも、そんな必要がないぢやありませんか、妾はもう全然用意をして来ましたの、トライチユさん、此國境で何かなさる事がありますわ、唯お金が——澤山のお金が入用なんですわ、コオリヤと一緒に一人の兵士と、一

人の牢番が逃げることになつて居るのですわ、無論此處迄逃げて來られませう——それは分りきつて居ますわ、それで妾は今日直ぐと出發するのですわ——一刻も愚圖々々しては居られませんわ」

長女の夫「マルシヤ、よく思ひ立つて呉れた」

マルシヤ「え、有難うよ」

主人の妻「夫を打ち見やり」お金……」

主人「妻を打ち見やり」金があるか、それはお前の掛りぢやないか」

主人の妻「途方に暮れ」唯つた三千ルーブル……」

マルシヤ「五千ルーブル要るのですわ」

主人の妻「でも、それ丈でも……（主人の顔を見る、主人は黙して頷く。喜ばしげに）では三千ルーブルでも要に立てば」

ジトフ（内氣に）私達のを集めませうよ、僕も二百ルーブル持つて居ます」

ルンツ「ポラーク君は非常に金持ちです」

アンナ「あの人には頼度くありませんわ、あの方は冷淡なんですもの」

長女の夫「馬鹿な！ あんな男からうんと取つてやらなくちやいけないよ、ハエチヤ、ポラーク君を呼んで來給へ、非常な問題があると云つて御出でよ、

でない先生來やしないかられ」

マルシヤ「さて、肝腎の用事が済みました、お金が出来ました（歌ふ）招くが如く我を見て、さて朗らかに歌ふなり、何を踏ふ我が友と、我に言はんとする

がごと……。トライチエさん、妾まだ貴下にお話し仕度いことがあるのよ、何うして那様に泥だらけにお成なすつたの、何處へ行つて在つたの（兩人去る）

ルンツ「何と云ふ立派な娘だらう、太陽のやうだ、火のやうな力が渦を巻いてるよ、ユウジツトのやうな女だ」（ユウジツトはヘツペ）

アンナ「火があり過ぎるわ、革命には渦巻や爆発は要りません、革命は忍耐と、精力と沈着を要する一種の職業だと云ふ事を御存じですか、そして此の渦巻なんかいはい……」

ルンツ「革命には才能が要ります」

アンナ「それは存じませんが、けれども才能と言ふ言葉は随分亂用されて居りますわ、網渡りが出来ても——それが才能なんですからね、一生涯星ばかり見て居ても……」

長女の夫「さうだ、さて天文学の先生、天の方のお仕事は何うですかね」

主人「いや有難う、地の方の仕事は何うだね」

長女の夫「御覽の通り頗る拙劣いのです、先生、地上には何處かに滞りがあります、始終何處かで一人の人が外の者の喉を締めて居ります、何處かで誰かが泣いて居ります、何處かで誰か、外の者の裏切りをやつて居ります、そして

僕の足は——又僕を惱めて居ります、僕等は天體の調和と云ふものから遙か離れた處に居るのです」

主人「天にも調和許りはない、天にもカタストロフはやつて来る」

長女の夫「おや、ちや天にも希望は置かれないうですな、時に君……君、

ストルツ君、何を考へて居るんですか」

ストルツ「人間と云ふものは、強くなくらやならんと云ふことを考へて居ります」

長女の夫「ほう、それで君は強いのですか」

ストルツ「強くないのです、僕の生れた時、自然が、僕の力を造る性質を拒ん

だのです、僕は血が恐ろしくてならないのです、それに……」

長女の夫「それから蜘蛛も恐いのでせう、尋でに伺ひますが君は服の出来合を

買ふのですか、それとも新たに拵へるのですか」

ボラアク（近づき來り）「何か御用ですか、皆さんお早やう」

長女の夫「やあ、ボラアク君、聞いて呉れ給へ、實は二千ルーブル入要なんだがね……だが借りるとはよう云はない、誰も君に返すものはなからうから」

ボラアク「一體何う云ふ目的で入要なのですか、それを承りませう」

長女の夫「ニコライの脱獄に付いて入要なんだ、君、出して呉れるかね」

ボラアク「承知しました」

長女の夫「彼は全く……」

ボラアク「いえ——どうぞ細かい事は言はないで頂きませう。セルゲイ・ニコライ井ツチ先生、私は今日先生の析光機を拜借しても宜しう御座いますか」

主人「どうぞ、私は今日休みにするから」

(ボラアクは一禮して退く)

長女の夫「あれがほんとうの學者だ、ねえさうでせう、阿父さん」

主人「あの人は却々才能のある人だ」

アンナ(上の方を見て)「一體天文学なんて何の用に立つんだらう」

長女の夫「兎に角曆を作る役には立つからな」

(マルシヤとトライチユ近寄り来る)

マルシヤ「ではさうして下さいまし、トライチユさん、おや、皆さんまた阿父さんを攻撃して在しやるのね、アンナさんは天文学を目的の敵のやうにして在しやる」

主人「マルシヤ、俺はもう馴れて居るよ」

アンナ「妾は敵なんかは持つて居やしませんわ、阿父さんはそれをよく御存じの筈です、妾が天文学を嫌ふ理由は、地の上はまだ種々のすべき事があるに拘らず、空なぞを眺めて居る人の氣が知れないからです」

ジトフ「天文学は人間理性の勝利です」

アンナ「妾の考では、地上に一人の饑渴者の無なつた時が、更に大きな理性

の勝利だと思ひます』

マルシヤ『此の山！ 此太陽！ 此日光を浴び乍らよくもアンナさんは議論が仕て居られますのねえ』

ルンツ『アンナさん、貴婦は學問の敵なんです』

アンナ『學問の敵ぢやありませんわ、社會の義務を遁れる爲の、口實に學問する學者の敵なんです』

ストルツ『人間は「仕やう」と思つて仕なきあ不可ません、義務は束縛です』
主人の妻『妾は恁麼話は嫌ひです、恁麼ことで氣を腐してなるものですわ、ワ

シリエウ井ツチさん——、もうお立ちなさい、貴下にお話がありますの、(ウ
エランダの方に連れ行く) 貴下はお金を保持して在しやい、ポラアクさんは寛
大な人ですから——、若し要れば…… (笑ふ)、ただどの人は矢張觀象儀の
様ですれえ』

ジトフ『貴婦の加奈陀旅行は何うなるのです奥様、お金が……』

主人の妻『其は直に算段出來ます、未だ一年ありますもの、それよりはお友達として御願ひ仕ますが、主人が何も言はないのを好い氣にして、皆で又老人を苛め相に仕て居ますから、貴下は味方を仕てやつて下さいまし、——不可いのですか？』

ジトフ『え、承知しました』

主人の妻『では、妾は彼方へ参ります、コオリヤに、洗濯したものを出しといて遣らなきアなりません、それに種々外に用事もありますから…… (去る)
主人『私は面白い談話は大好だ、何んな話にでも光はある、話は銀河の様に美しいものだ、だが、遺憾乍ら人間は大抵銀事を話す』

アンナ『巧い言葉を使つて、事業から遁れる者が世間にはあります』
長女の夫『阿父様、貴方は實に落着て在つしやる、貴父はお怒りになる事の出

来ない方だと思ひます、貴父は一度でも泣いた事がお有ですか、勿論、夫は貴父がズボンもなくつて飛廻つて居られた幸福な時代を言ふのぢやありません、今の事を言ふのです……」

主人「いや、泣くとも、私は實に涙脆い」

長女の夫「ほんとうですか！」

主人「はハレエが出現を豫言したベルラ彗星を發見した時も涙を流した」

長女の夫「僕には理解は出来なけれども、それは立派な理由だ、どうだ諸君には理解出来るか」

ルンツ「それは出来ませんが、ハレエだつて間違ふこともありませんから」

長女の夫「そんな時には絶望の餘り髪の毛でも撚るのだらう」

マルシヤ「ワアレンチン、それは餘りだわ」

アンナ「自分の子が銃殺されさうにしてるのに平氣で居られるのですわね」

主人「一秒毎に世界では誰か人が死んで居る、宇宙では多分一秒毎に或る世界が滅んで居るだらう、俺は一人の人間の死の爲に、泣いたり、絶望したりして居ることは出来ない」

長女の夫「ウム、成程、ストルツ君、之は強い考へだ、君と同じ趣味だ、若しニコライが脱獄を仕損つて、奴等がニコライを銃殺……」

主人「それは無論悲しむ可き事だ、けれども……」

マルシヤ「阿父さん、冗談を仰しやらないで下さいまし、そんな冗談を聞くと妾堪らないのですもの」

主人「マルシヤ、俺は冗談を言つて居るのぢやない、俺は外の者が冗談を言ふ時に、それを面白がることは出来るけれども、俺は全然自分で冗談を言ふ事は出来ない——譬へばワアレンチンのやうに」

長女の夫「いや有難う」

ジトフ『それは實際だ、先生は決して冗談を仰やりはせぬ』

マルシヤ（顔を曇らして）『では尙悪いわ』

長女の夫『天文学と云ふ綿を耳へ詰め込むんだ、さうすれば、さぞ静かで樂だらう、譬へ全世界が犬のやうに吠えても』

ルンツ『佛陀が青年時代に飢えた虎に逢つた時、彼は自分の身を投げ出して、うは言ひませんでしたか、我は神である、我は重大なる任務を持つてゐる、されど汝は唯、飢えたる一箇の虎である』——佛陀は自分の身を投げ出したのです』

主人『君等はあの銘を讀んだか（天文臺の入口を指さす） Haec domus Uraniae est, Curvae procul este profanae, Temitur hic humilis tellus! Hinc itur ad astra. それは恠う云ふ意味だ、之はウラニヤの寺院なり、空しき憂よ、此處より遠く去れ、此處には低き地は賤しめらる、此處よりは星の世界に至るべし』

長女の夫『けれども先生、貴方が空しき憂と仰しやるのは何の事ですか、僕は榴散彈の破片で骨に徹るまで足を負傷しました——貴方のお考へに依れば之も空しき憂ですか』

アンナ『無論ですとも』

主人『さうだ、死とか——不正だとか——不幸だとか——地上の有ゆる暗い影は皆な空しき憂ぢや』

長女の夫『では若し明日、新しいナポレオンが、新しい暴君が現れて世界を鐵拳で壓し潰しても——それも空しき憂に過ぎないのですか』

主人『さうだ、俺の考へではさうだ』

長女の夫（四邊を見廻しながら聲高く笑ふ）『ウム、それで分つた！』
アンナ『それは酷い事だわ、或る神様は人間の苦しむのを放擲といて、自分獨

りでは……』

マルシヤ『トライチユさん、何故貴方は何も仰しやらないのですか』

トライチユ『私は聞いてるのです』

長女の夫『さう云ふことを言へる人が、政府から給料を貰つたり、自分の屋根の上に安全に坐つて居られるのだ』

主人『アアレンチン、いつも安全ではない、ガリレオは牢の中で死んだ、ジョルダノー・ブルノオは火災にされた、星の世界に至る道は、いつでも血を以て彩られて居る』

長女の夫『無論さうです、けれどもそれは何でも無いことぢやありませんか、基督教徒だつて迫害されました、自分達の代りに、罪の無い天文学者が火災にされるのを、凝つと見て居たのです』

アンナ『阿父さんは、そんな記念品さへ持つて在らつしやるのですよ、鐵の戸

の中に藏つて』

主人『アンナ、そんなことを言ふものぢやない』

長女の夫『どんなくだらないものが藏つてあるのだ』

アンナ『何處かの天文臺が破壊された時の煉瓦のかけらだの、草稿の断片だの』

マルシヤ『アンナさん、なんて酷い言ひ方でせう、コオリヤは自分でそんな口

のきゝやうをしますまい』

アンナ『兄さんは情にもろすぎるわ、それがあの方の缺點だわ』

ペエチヤ、誰にも氣付かざるやうに出で來りて黙して壁に凭りかゝる。

長女の夫（激して）『だから俺達は前へ出る度に打たれるのだ』

マルシヤ『もうお止しなさいよ、およしなさいよ、トライチユさん、あなたは

何うお思ひですか』

トライチユ（遠慮しながら）『人間は常に前へ進まなければなりません、此處で

は敗北と云ふお話がありましたか——然し敗北と云ふ事は決してないのです、私は唯勝利を知つて居ります、地球と云ふものは人間の手の中にある蠟燭です、人間はそれを壓したりねつたり又新しい形に拵へなければなりません、しかし人は前へ、前へと進んで行かなければなりません、若し壁に突き當つたらば壁を衝き壊す丈です、山に打突かつたらば——それを除ける許りです、淵に出遇したらば——それを跳び越すのです、羽翼がなければ——それを作るのです！」

長女の夫『さうだ、トライチュ君、それを作るのだ』

マルシヤ『妾はもう羽翼を持つてゐるやうな氣持がしますわ』

トライチュ（遠慮し乍ら）『しかし人は前へ進まなければなりません、若し地が足の下で裂けたならば鏝で縫ひ合はすのです、若し地面が粉々に砕けたらば、火で熔かして固めるのです、若し頭の上に天が落ちて來たら、手を伸ばして

突き返すのです——恚う！——(突き戻す動作をなす)

長女の夫『成程、恚うか！』

一二の人、地球を擔ひて立つ、アトラス(ギリシヤの神)の如きトライチュの姿勢を機械的に真似る。

トライチュ『しかし人間は、太陽の輝いてる間は、前へ前へと進まなければなりません』

ルンツ『だがトライチュ君、太陽はいまに消えて了ひますぞ』

トライチュ『では、新しい太陽に火を點けなければなりません』

長女の夫『さうだ、さうだ、それから！』

トライチュ『そして太陽の輝いてる間は、常に、そして永久に、我々は前へ進まなければなりません、諸君、太陽も亦一箇の平民です！』

長女の夫『之が僕の天文学だ、えい畜生』

ルンツ「絶えず、そして永久に前へ進まなければならぬ」
長女の夫「さうだ、前へ前へと、畜生！」

一同興奮して一團づゝに別れる。

ルンツ「諸君、僕は諸君に希望します——此儘には何うしても爲て置かれませ
ん、それから死んだ人達です、いえそれは戦つて自由の爲に倒れた人達許り
ではありません……犠牲になつた人達を云ふのです、彼等は幾十億の多數に
上つて居ります、彼等は罪はないのです、然るに彼等は虐殺されたのです」

(沈黙)

マルシヤ(明晰した聲で、聲高く叫ぶ)「妾はお前の前に誓ふ、山よ！ 妾はお
前の前に誓ふ、太陽よ！ 妾はニコライを必ず救ひます……此山には反響が
ありますの？」

ルンツ「いやありません、併し反響があるならお伽噺にあるやうに、然り然り

と返事をするでせう」

アンナ(シトフに)「餘り感情的ですわね、妾はローレンチンの氣が知ませんわ」
ジトフ「いゝえ、僕も賛成です、僕の濠洲へ行くのは延ばしました、僕も
一度ニコライ君に逢つて行き度いと思ひます」

マルシヤ(空を仰いで)「妾は飛び度いわ、飛び度いわ」
長女の夫「これが僕の所謂天文学だ、如何ですか、天文学の先生、恠う言ふ天
文學は貴方の御氣に召しませんか」

主人「いや氣に入つたよ、あの人はトライチユ君と言つたかな？」
長女の夫「僕はあの人をビスマルクと呼ぶやうな意味でトライチユ君と言つて
居ます、ほしとうにあの人の眞の名前は何んと云ふのか知つてる者はありま
すまい」

ルンツ(此方の一團より、彼方の一團へ駆け歩るき)「僕は嬉しい、僕は嬉しい、

諸君は僕の両親が殺されたのを知つて居ますか、僕の姉妹も殺されたのです、僕は今迄に恚んな話をしやうとは決して思はなかつたのです……何故話すのだ、と私は胸に思つて居ました、私は心の奥深く其事を隠して置かうと思つたのです、僕は自分唯一人で、それを知つて居たかつたのです、だが、もうい……諸君は僕の親や姉妹が、何んなにして殺されたか御存じですか、トライチュ君、君は分かるか？ 僕は決して今迄に……」

次男（ジトフに向ひ）「何の爲にあんなに騒いでるのせう」

ジトフ「いや、まあいゝぢやないか」

次男「凡ての物が死ななければならぬとすれば——君も僕も此山も、皆な死ななければならぬとすれば、何の爲に騒いで居るのですか」

凡ての者一團一團に別る、唯主人のみ獨離れて立つ。

長女の夫（マルシヤに向ひ）「奴等はトライチュ君を絞罪に處して

然る可しだ、ニコライは實に偉い發見をしたものだ。マルシヤ、ニコライは、逃げ出すのだらうね！」

マルシヤ（顔を曇らして）「妾は、外に一ツ心配があるんですわ……」
長女の夫「何う云ふ心配だ」

マルシヤ「話す程の事ぢやないの、詰らない事だわ」

長女の夫「何に關係した事だ、何うしてそんなに考へ込んで居るのだ」

マルシヤ（始めは答へず聽て急に笑ひて歌ふ）「いざ疾く逝がれん」

主人の妻（窓より首を出し）「妾の鷺の兒よ御飯だよ」

長女の夫「トウ……トウ……トウ！」（鶏を呼ぶ）

マルシヤ「シヤンパンを呑み度いわね、ありますかね、母様」

一同「さうだ、さうだ、シヤンパンを！」

主人の妻「シヤンパンはないけれどもブランデーがあるよ」

一同笑ひ叫ぶ。

主人(マルシヤを傍へ伴れ行き)「マルシヤ俺は書齋へ行くよ、皆なの邪魔をし
たくないから」

マルシヤ「ぢや、在らつしやらないのですか今日は楽しい日ですのに」

主人「さうだ、俺はお前を歓迎する爲に、臨時休みをしやうと思つて居たのだ
が、もう駄目になつた」

マルシヤ「それではお晝の御飯丈一緒に食つて頂戴」

ルンツ(聲高く叫ぶ)「ボラアク君も呼ばなけやいけな、あの人は分つた人だ、

立派な人だ、僕が呼んで来やう」

一同「さうだ、さうだ、ボラアク君、ボラアク君！」

主人「いや、俺は一緒に食べまい」

マルシヤ「厭だわれえ、母さんが悪くお取にならなくつて？」

主人「俺は仕事をしてると言つて呉れ、だがマルシヤ、お前出發前にもう一度

俺の處へ来てお呉れ」誰にも氣付かれずして行く」

マルシヤ「ストールツさん、何處に在しやいますの、貴方は妾の騎士にお成りに

なるんですよ、妾達はまだ澤山に仕事がありますわ、れえ皆さん、此方はほ

んとに、奇態に探偵に似て在しやるぢやありませんか」

アンナ「そんな失禮な事を云ふ者ぢやなくつてよ」

マルシヤ「恠う云ふことがあつたのです、妾が自分の身を隠さなければならな

いので、一晩此方の處で泊めて頂かうと思つたのです、すると此方が仰しやる

には、それは不可ません、僕は或る穩やかな獨逸人の家に居るのですが女と

犬は決して連れて来ないと云ふ約束をしたのですと……」

ストールツ「え、誰も泊めることはならないのです、僕の室には新しい絹張

りの長椅子が置いてあつて、家の人は誰か其上で寝て居やしないかと思つて

見に来るのです、いや、酷い人達です』

長女の夫『其處を引越したら何うです』

ストルツ『それは出来ないのです、前金で拂はせられてるんですから』

アンナ『ちや、拂はなけりやい、ちやありませんか』

ストルツ『然うは出来ないのです、あの家は……』

ルンツ（ポラアクを伴ひ來り叫ぶ）『さあ來ましたよ、無理に引張つて來まし

た、析光器に、蛭のやうに吸ひ付いて居たのを引き放して來たのです』

ポラアク『諸君、壓制ですな、僕はまだ用事があるのです、用事が濟まないの
です』

マルシヤ『ポラアクさん、今日は大變に嬉しい日なのです、貴方はほんとうに

いゝ方ですわね——、皆が貴方を好いて居るのですよ』

ポラアク『いや有難う、けれども何うして皆さんが、そんなに嬉しいのだが僕

には解りません、革命は思はしくなかつたのぢやありませんか』

長女の夫『處が新しい計畫が出来たのだ、僕等は……』

ポラアク（輕蔑するが如き手付をして）『成程、成程』

マルシヤ『天文學萬歳！ 軌道萬歳！』

ポラアク『僕はアルコール氣の者は少しも飲れないのです、頭が痛くなつて吐

氣を催しますから』

長女の夫『ポラアク君に一番いゝ飲物は器械油だらう、ねえポラアク君、君は

油を飲むかい』

マルシヤ『いゝえ、皆なブランデーを飲むのです、混ぜ物のないブランデーを』

ルンツ『來給へ、君、君は立派な男ぢやないか』

主人の妻『さあ早く來つしやい、なぜ來ないの、議論をしないで早くお出で』

マルシヤ『直ぐ行きます母様、直ぐ行きます、ポラアクさんがまだ愚圖々々し

て在しやるんですよ、けれども皆さん何うなすつたんです、何うして皆なそんな真面目な顔をして居るんですか、ジトフさん貴方歌が歌へますか」
 ジトフ「何うにか一緒に歌へませう」

ルンツ「マルセイエーズですか……」

マルシヤ「いえ、マルセイエーズは旗と一緒に次の戦争まで藏つて置かなければなりません」

トライチユ「私も同意見です、お寺より外では歌へない歌もあるんですから」
 長女の夫「何か陽氣な歌が可いね、あゝ日向は暖かいことだ」

アンナ「ワリーヤ、足を露しちや不可せんよ」

マルシヤ（歌ふ）「喜び溢るゝ空——、麗かなる日、——吾等を招く」

一同（次男を除きて、皆加はる）「樂しき業、——五體の力もて——いざとく進め、我が兄弟——榮ある太陽に、幸あれ、——地球の僕なる太陽に——、

幸あれ、榮えある太陽に——」

長女の夫「動かして呉れアンナ。お前は死んだものゝやうに俺を動かすぢやないか」

一同（歌ふ、ホラアクは真面目に拍子を取る）「襲ひ來る暴風には——青空の光

も——勝ち得じ——、暴風の暗をつらぬき——電光ぞ——勝てり——幸あれ、
 力ある太陽に！ 地球の主なる太陽に——力ある太陽に、幸あれ！」

（歌の最後の句、家の角の後にて繰返さる、次男ハエチヤ獨り止まり、陰鬱なる顔をして一同の後を見送る）

一同（舞臺の後にて）「地球の主なる太陽に——力ある太陽に、幸あれ！」

第三幕

廣く、暗き、客間の如き部屋、家具少し、弱々しきものなし、二個の書棚、
 一臺の洋琴。後の壁に戸口一つ、二個の大なる伊太利風の窓。窓よりヴェラ
 ンダ見ゆ。窓も扉も開かれ、異様に星の輝ける、暗き、黒き空見ゆ。部屋
 の隅の、壁の側なる、舞臺の前面に近く、一脚の卓あり、其上には黒き笠を有
 てる洋燈置る、卓に對して主婦、インナのアレクサンドロウナ、新聞を讀む。
 長女は何か縫物をなし、ロンツは部屋の中を行來す。撞木杖を突ける長女の
 夫、ウエルチヨウチエフは、書棚の前に立ちて書物を引出さんとせり。唯山
 を支配せるが如き、深き寂漠。幕の上りたる後も、暫し沈黙續く。
 長女の夫(咳く)『えい！ 畜生め！』

主人の妻『ローリヤ、お前讀んだかれ、市長が、カソウスキイの放免を拒んだ
 ・相だよ』
 長女の夫『ええ』
 主人の妻『すると、一體何うなるんだらう』
 長女の夫『多分、銃殺するでせうよ』
 主人の妻『未だ何時迄續んだらうねえ、未だ犠牲は足りないんだらうか』
 長女の夫(腕の下に、本を一冊持つて來る、そして落す)『えい、畜生、アンナ、
 拾つて呉れ』
 アンナ(悠りと立ち上り)『え、直ぐ』
 ロンツは黙つて本を拾ひ上げて卓の上に置き、又續けて行き來す。
 長女の夫(窮屈相にして、書物を繕く、アンナに向ひ)『未だお前は何か突つく
 のを止めないのか』

アンナ『でも人は何か仕て居なきやなりません』

長女の夫『では、本でも讀んだら可いぢやないか』

(アンナ、答えず、沈黙)

長女の夫『僕は逆も堪らぬ、棺の中に入つて居るやうな——此の呪ふべき「寂

さ」、これがもう八日間も續けば、俺は箱へ身を投るか、酒を飲み始めるか、

でなきやボラアクを斬り付けに行くかも知れない』

ルンツ(神經質に)『實に凄(こ)い寂(こ)漠(こ)だ、若(も)しや、バイロンの夢(ゆめ)が事實(じじつ)となつたの

ぢやありませんか、太陽(たいやう)は消(き)え果(は)て、地上(ちじやう)の總(あ)ゆる生物(せいぶつ)は滅(ほろ)び、僕(ぼく)等(ら)が生(い)き

残(のこ)つた人間(にんげん)ぢやないのでせうか、實(じつ)に凄(こ)い寂(こ)漠(こ)だ』

長女の夫『ジトフ君(くん)、君(きみ)は其(そこ)處(こ)で何(なに)を仕(し)て居(ゐ)るんだ』

ジトフ(ゲエランダから)『僕は眺(なが)めて居(ゐ)るのです』

長女の夫(輕蔑(けいべつ)的に)『眺(なが)めて居(ゐ)る! (沈黙) 僕(ぼく)は仕(し)事(ごと)を仕(し)ないでは居(ゐ)られない』

アンナ『仕(し)方(かた)がな(な)いぢやありませんか、我(が)慢(まん)しな(し)きやな(な)りませ(ま)せんわ』

長(ちやう)女(にょ)の夫(と)『我(が)慢(まん)仕(し)度(ど)きやア、す(す)るさ、俺(おれ)は——え、畜(ちく)生(せい)め!』

主(しゅ)人(にん)の妻(つま)(沈(ちん)思(し)しつゝ坐(ま)る)『サアセンカ(か)が生(い)て居(ゐ)ると恰(ちやう)度(ど)も(も)う二(に)十(じゅう)一(いち)だわ……』

奇(き)麗(れ)な兒(こ)だ(だ)つた、コオリヤ(ヤ)によ(よ)く似(に)て居(ゐ)た(た)つ(つ)けが、アンナ(ナ)お前(まへ)ま(ま)だ覺(かく)えて居(ゐ)

る(る)か(か)い』

アンナ『否(いな)え』

主(しゅ)人(にん)の妻(つま)『妾(めかけ)には未(ま)だ生(い)て居(ゐ)る様(よう)に思(おも)は(は)れるよ、……お前(まへ)はよ(よ)く打(ぶ)つた(た)ねえ、ア

ニユタ、お前(まへ)は悪(わる)い兒(こ)供(ども)だ(だ)つた、だ(だ)けど何(なに)う(う)して彼(あ)な(な)様(よう)に急(いそ)いだ(だ)つた(た)のだらう、

三(さん)日(にち)で死(し)んで了(しま)つた(た)のだもの、盲(まう)腸(ちやう)嫉(し)妬(だ)だ(だ)つて——彼(あ)な(な)様(よう)小(こ)さ(さ)な兒(こ)が! 彼(あ)

様(よう)小(こ)さ(さ)な體(たい)を切(き)解(かい)した(した)ん(ん)です(す)もの——察(さつ)して下(くだ)さいまし、ヨセフ・ア(ア)ブラモウ

井(い)ツチ(ち)さん……』

長(ちやう)女(にょ)の夫(と)『もう可(い)ぢやあ(あ)りませ(ま)せんか、貴(あなた)女(にょ)は死(し)んだ(だ)者(もの)の話(はなし)を次(つぎ)から次(つぎ)へ話(はな)

て在しやる、死んだ方が——善いのです——死んだ方が怜悯なんです、ジトフ君此處へ来て坐り給へ、——何かお喋りを仕やうぢやないか」

ジトフ「直ぐと行きます」

ルンツ「堪らない寂漠だな！」

長女の夫「マルシヤは手紙に何と言つて来たのです阿母さん」

主人の妻「吐息して」「種々事を書いて寄越したんだよ、けれども妾には毫も解らないんだよ、一週間すれば歸ると云つて来たが、何が故障でも出来たらしい

——すると又一週間と言つて来たの、——所が昨日の手紙には……」

長女の夫「成程、解つた、——阿母さん、何か新しい事を御聞込みでせう」

主人の妻「若しかすると、コリュシカが病氣に成つたのぢや無いだらうか」

長女の夫「病氣ですつて！ 死んだんぢやないでせうか」

ルンツ「それなら、マルシヤが死骸を持つて来さうなものだ」

主人の妻「まア何を賣下方は言ふんですか、何と思つて那樣ことを言ふんですか」

ジトフ（入り来り）「何んなお喋りをするんですか」

長女の夫「まア坐り給へ、君は彼處で何を仕て居たんだ」

ジトフ「星を見て居たのです、今夜の星は、不思議に奇麗で、落着て居ないの

です」

次男入り来る、彼は此幕の間に幾度も舞臺を通り過る。

ルンツ「僕も今夜は星を見て居られないんだ、僕は星から隠れて、何處かへ逃

やうと思つても駄目だ、地下室へ隠れても、星の存在を感じないで居られな

いんだ、何處にも空間は毫もない様に思はれる、そして地上の生て居るもの

や死んで居る者の、恐ろしい一團が、星の方に押寄せて行く様に思はれる、

そして星の中には何物か潜んで居て……いや僕は知らない」(部屋を歩き来し

ながら尙ほ身振を續ける)

ジトフ「此處の空氣は非常に澄んで居ます、カリフォルニアに於ては……」
長女の夫「君はカリフォルニアに居た事があるのかね」

ジトフ「え、カリフォルニアのリックの天文臺に居たんです、餘り物を見て居ると恐ろしくなるものです」

次男「母さん、あのお婆さんは何うして臺所へ来て居るんですか」

主人の妻「何のお婆さん？ あゝあれかい……あれは上つて来たから妾が家へ

入れてやつたのだよ、下の谷の方から来たんだよ、乞食で聲のやうだわ——

何を聞いても判りやしないの」

次男「何うして山へ上つて来たんだらう、何うして此處へ來られたのだらう」

長女の夫「阿母さん、貴女は此處へ貧民院を建てたらいゝでせう」

主人の妻「建てますとも、セルゲイ・ニコライ井ツチさへ反對しなければ建てま

すとも、お前さんあれを讀んだ事があるかい……」

次男（執拗く）「阿母さん、何うしてあのお婆さんは上つて來たんでせう」

主人の妻「何うしてだか知らないよ（長女の夫に）お前さんマルシヤが飢えた

子供の事を書いたのを讀んだ事がありますかい」阿母さん、パンが食べたい」

子供が恚う言ふと阿母さんはパンを求めに出て行つたの、何うしてパンを手

に入れたかそれは判らないけれども、家へ歸つて見るともう子供は死んで居

たの……」

アンナ「恚うなると、慈善と云ふ事も役には立ちませんわね」

主人の妻「ちやお前は見殺しに仕ても可いと云ふのかい」

次男「死なして置いたらいゝでせう！ ルンツ君、君は今日大變悲しさに見

えるね」

ルンツ「え、僕は酷く氣が替ぐのです、今夜は變な晩です、譯は判らないが變

な晩です、幽霊の出さうな晩ですよ、君は今夜星を見ましたか」

次男『僕は愉快で堪らないんですよ！』（聯絡なき曲にてピアノを弾く）

長女の夫『およしよ』

次男（弾き且つ歌ふ）『僕は愉快です』

主人の妻『お止めよ、ベテチユカー！』（ベエチヤは音をさしてピアノの蓋をなし、ペランダへ出て行く、沈黙）

ルンツ『トライチユ君はもう歸つて来るでせうか』

長女の夫『うまく行かないから、今夜か明日の朝歸るだらう、ジトフ君、何故、

君はさう始終黙り込んで居るんだね』

ジトフ『僕は話には興味がないのです』

ジフト『僕は氣が鬱いでならないのです、氣が鬱いで！ 人間は慙んな時に自

殺をするんでせう』

長女の夫『馬鹿な！ 天文學者が自殺なんかするものか』

ルンツ『僕は詰らん天文學者です、全く詰らない』

アンナ『その方がいゝのです、さうしたら貴方は何か理窟に合つた望のある仕事をお始めになさるでせう』

ルンツ『僕は今夜は星が恐くつてしやうがない、僕はいつも慙う考へて居ります、星程力の大きなものはない、星程冷酷なものはない、又星程僕に對して全く無頓着なものはない、そして僕は自分程小さく哀れな者はないと、慙う思ふのです、お判りですか——僕は猶太人の虐殺があつた時に、何處かに隠れて居て、何が起つたか知らないで居た雜子のやうです』

次男入り来る。

長女の夫『星と——猶太人虐殺は、奇妙な結合だね』

主人の妻（長女の夫に戒しむるが如き目配をなし）『餘り神経を使ひ過ぎるからそんな事を考へ出すのですよ、若しそんな事を考へて居たら、——マルシヤ

が行つてからもう一月半にもなつてまだどうにもならないのですから……だ
けど妾はいろんな事に馴れて居ますから——でも動悸がしてしやうがありません
せん』

ルンツ『雪が飛んでも窓板が鳴つても凝と坐つて居るのです——何を考へて
るのでせう』

長女の夫『何も考へて居るのぢやない、雪が降るとでも思つて居るんだらう』
ルンツ『僕は無窮と云ふものが恐いのです、無窮とは何でせうか、なぜ無窮と
云ふものがあるのでせう、僕は星を見て居ます、一、十、百萬——けれども
お終ひぢやない、あゝ僕は誰に苦みを訴へたらいいのでせう』

長女の夫『何故苦みを訴へやうなどと思ふんだ』

ルンツ『僕は小さな猶太人です……』(歩き廻り乍ら手を振るのを續ける)
ポラアク(入り来る)『今晚は! 暫く此處へ居らして戴いても宜しう御座いま

すか、皆さん、お邪魔にはなりませんか』
主人の妻『いゝえ、決して、どうぞお在で下さいまし』

ポラアク『ルンツ君、磁針が大變に振動して居るぜ、明日は太陽を観測しなけ
りやならない、ルンツ君何事かを自ら呟やく』ジトフ君、僕はもう君には何も言
はない、君は仕事を棄て、了つたのだから、君は何時出發するのだ』

ジトフ『明後日だ』

主人の妻『何んですつて、ワシリ・ワシリエウ井ツチさん、貴方はコリエシユカ
を待て居て下すつたのでせう、何うして貴方は急にお出發になるのですか』
ジトフ『行かなくぢやならないのです、もう一刻も居ることは出来ないのです、
さもなくつても僕は餘り長く居過ぎたのです』

長女の夫『君が行つて了へば尙ほ淋しくなるだらう、ニュージーランドなどは何
うでもいゝぢやないか』

ジトフ「いゝや、僕は行かなくちやならん」

アンナ「ポラアクさん、何故貴方はお仕事をなさいませんの」

ポラアク「僕は今日夢を見てるのですよ、アンナさん、僕は今日丁度三十二

歳になりました、丁度今僕は晩の十時三十七分に生たのです、即ち時差を引

き去つたならば、(時計を眺め)丁度十時十六分になります」

長女の夫「いや、そりやお目出度う」

ポラアク「いや有難う、僕は今申しました通りに今夜夢を見て居るのです、僕

は三十二になるまで學問と自分の名聲の爲に可なり仕事をしました——細か

い事は申しますまい、が兎に角僕は今こそ個人的生涯の爲に何かすべき權利

があると思つて居ます」

長女の夫「君は結婚するんだらう、さうに違ひない、いやこりや不意打だ」

ポラアク「さうです、御推量通り僕は結婚するのです」

主人の妻「それはまあ結構な事で御座います、どうか、いゝ奥さんを見付けて上げたいものです」

ポラアク「僕の花嫁は今年女子大學を卒業するのです、奥さん、僕も、もう氣持のいゝ此お宅からお暇するのも直きたらうと思ひます」

主人の妻「まあ貴方はするい方ですわねえ、一度も貴方はそんな事をお話しに

ならなかつたぢやありませんか」

次男(亂暴に)「僕も結婚するのだ、僕にも花嫁がある、美人だぜ」

ポラアク「ほんとうですか、冗談でせう」

主人の妻「これ、メエチヤ」

(メエチヤは聲高く笑ひてベランダの方に行く)

アンナ「何うしたんだらう、あの兒は調子が外れて居ますわ」

主人の妻「妾には毫とも判らない、お前達が來てから以來、あの兒は全然變つて

了つたのだよ、ヨセフ・アラモイ井ツチさん貴方はヘエチャと仲がいの
ですが、一體何うしたのか御存じありませんか、妾はほんとうに心配でなり
ません」

ルンツ「ヘエチャですか、あの人は立派な、勇気のある青年です、あの人も同
じやうに気が鬱ぐんでせう」

ボラアク「皆さん、どうぞお話下さい、僕は今夜は何だか神経質になつて居
ます、皆さんのお話を喜んで伺ひます」

ルンツ（咳く）「星だー 星だー」

ボラアク「ルンツ君、君は星に就いて何んな話をしやうと云ふのだ」

ルンツ「我々が坐つて、もう最後の勝利が得られたと豫期し且つ考へて居た時
も、星は雲の上の何處かで光つて居た、そして今でも光つて居る……それを
考へると気が狂ひさうだ……」

長女の夫「仕事だ、仕事が待つて居るのだ——それなのに此呪ふべき籠の中で
鎖に繋がれたやうに坐つて居る、あゝ！（跛を引きながら室を横切つて窓の
方に行き一寸外を眺めて總て自分の場所に歸る）トライチュが歸つて来たや
うだ」

ボラアク「僕、トライチュ君は大好きです、——實に眞面目な男です」

主人の妻「では又駄目だったんだねー」

長女の夫（荒々しく）「貴方は何う思つて在したんですか、行り損つたと云ふ事
は手紙にも書いて來てるぢやありませんか」

主人の妻「あゝー あゝー コリュシユカや、妾のコリュシユカや、妾はもう
お前に逢へないのだらうかね——どうも虫が知らせる（靜に泣く）

トライチュ（入り來り一同に挨拶して坐る）「今晚は」

主人の妻「お疲れでせう、トライチュさん、何かお食りになりませんか」

トライチユ「有難う御座います、私は途中で食べて参りました」
長女の夫「何うだ君、様子は？」

トライチユ「大勢の人が捕つて了ひました、あのザニコオさんの絞殺されたことを御存じですか」

一同「ザニコオ君が？ 那樣ことはあるまい、僕等は毫とも知らん、何時の事だ？」

長女の夫「可哀相な青年だ、何うしてやられたのだ」

主人の妻「彼様若い方が見え……、去年コリエシカと一緒に此處に入來した方がぢやないかれ、ちよびつと上髭の生えた、色の淺黒い人……」

アンナ「え、爾うよ」

主人の妻「あの方は妾の手に接吻して下すつた、彼様な若い方が……、あの方には未だ阿母さんがあつたか知ら……」

アンナ「ねえ、阿母さん……トライチユさん、あの方は秘密でも漏したのぢやないでせうか、御存知ないの？」

トライチユ「あの方は死に對して男らしく進んで行かれました、けれども敵はあの方に對して陋劣なる處置を取りました、あの方は裁判の際に辯護士の臨席を申請されたのです、——あの方には一人の親戚もありませんでしたから、それを申請する事が出來たのです、然るに、敵はそれを約束して置き乍ら、履行しませんでした——、ですから、處刑の際には、唯だ處刑者の顔と星を見られた限りです、あの方の死刑執行は夜でした」
ルンツ「星だ、星だ！」(沈黙)

トライチユ「テルナツクでは、軍隊が二百人からの労働者を射ち殺しました、女や子供も澤山殺られました、スタアンベルグ洲では饑饉が起りました、人間の死骸を食へた者があつたと云ふ話です」

長女の夫「君は凶事の使者だ」

トライチユ「波蘭では猶太人の虐殺が始まりました」

ルンツ「何うして？ 又那樣ことか？」

ポラアク「何と云ふ野蠻だ！ 何て痴愚な奴等だ！」

主人の妻「それは多分、皆な噂だけでせう、種々な事が言ひ布されてるぢやあ

りませんか」

長女の夫「そこで吾々は何うなるのだ、吾々の事件は何うなるのだ」

トライチユ「明日、私は又出發します」

アンナ「行けば、敵が貴下を絞殺するでせう、唯だそれつきりですわ、待て在

しやい」

長女の夫「僕も一緒に行くよ、畜生め！」

アンナ「其の足で、何處へ行かうと言ふんですか、まア一度お反省なさい、貴

方は兒童ぢやないんだから」

長女の夫「あゝ……」

トライチユ「足は何うです、ワールンチン？」

長女の夫、手をもて否むな如き様子をなす。

アンナ「悪いのです」

主人の妻「それで、コリユシカの事は毫も御存じないのですか」

トライチユ「約束の時間に、誰も約束の場所へは來ませんでした、執行は延さ

れて居ると思ひます、爾う云ふ想像は付きます、私は明日彼地へ行つて見ま

す」

主人の妻「何うぞ御無事に、妾は自分の兒の様に祝福しますわ」

(トライチユの手に接吻す)

ポラアク（ジトフに）「何うだ君、労働者で、あれ丈教育があるんだぜ、實に驚く」

ジトフ「む——爾うだ！」

ポラアク「あの人の簡明な話振も、氣に入つた」

ルンツ（叫ぶ）「聞きましたか」

アンナ「何うなすつたの、何うして那樣聲をお出しになるの、吃驚するわ！」

ルンツ「又始つた！ 又父や母を殺し、幼兒を寸断に分裂くんだ、あの呪ふ可

き星を見た時に、今夜、爾う思つた、虫が知らしたのだ」

ポラアク「ルンツ君、まあ氣を落著け給へ」

主人の妻「トライチユさん、何うして、那樣ことをお話しなすつたの！」

トチイラユ「其位の事は何でもありません」

ルンツ「否、僕は落著いて居られない、僕は随分長い間落著いて居たのだ、僕

は兩親や姉妹の殺される時も落著いて居たのだ、僕はパリカアカデの上で兄や弟の殺された時も落著いて居たのだ、僕は可なり長い間落著いて居たのだ、今でも落著いて居たのだ、——落著いて居ないと言はれるかい、トライチユ君……それで、……皆な駄目なのか」

トライチユ「いや、我々は勝つてせう」

ルンツ「トライチユ君、僕は、學問が好きだつた、ポラアク君、僕は學問が好

きだつた、僕は極く小さい時から、町の子供が僕を虐めて居た時から、もう

學問が好きだつたのだ、奴等が僕を虐めた時、僕は恚う思つた、待て、今に

大きくなつて立派な學者になつてやらう、僕の家族の誇りになつてやらう、

僕の爲に一文なしになつた阿父さんや、僕の爲に泣いて呉れた阿母さんの誇

りになつてやらう——、あゝ、僕はほんとうに學問が好きだつた」

ポラアク「ルンツ君、僕は氣の毒で堪らんよ、僕は君を眞に尊敬する」

ルンツ「僕は物を食べない時でも、何んにも飲まない時でも、犬のやうに町を彷徨いてパン屑を探して居た時でも——僕は學問の事許り念頭に置いて居た、両親や姉妹が殺されたのを聞いて泣いて髪を掻き撚つて居た時でも學問の事許り思つて居た、そんなに僕は學問が好きだつた、けれども今は（低聲で）けれども今は學問を呪ふ、（叫ぶ）學問が何の役に立つか、學問などは無くなつて了へ」

ボラアク「ルンツ君、氣の毒で堪らないよ……」

アンナ「ルンツさん、しつかりなさいまし、そんなに言つては不可ません、貴方はヒステリーになつたのです」

ルンツ「え、ヒステリーですつて、ヒステリーでもようござんす、——それだから僕は落着いて居るんでせうよ、貴方は僕が落着いて居ないと思つて居らつしやるならばそりや間違つて居ますよ、僕は學問を棄て、此處を出て行き

ます、ようございませうか」

トライチユ「僕と一緒に來給へ」

ルンツ「え、行くとも、僕は學問を棄てるのだ、呪ふ可き星奴！ 又始めやが

つた、又始めやがつた！ 僕は叫び聲が聞えるよ、皆さんには聞えませんが

——僕には其が聞えます、僕には焼れてる人も殺されてる人も、寸斷に引裂

かれてる人も皆見えます、私達の中に基督が生れ、豫言者が生れ、マルクス

が生れた爲に、奴等は僕等を殺すのです、僕には見えます、冷たい、寸斷々々

に切られた死骸が、窓の外から僕を凝つと噴めて居ります、それらの者は僕

の寝てる枕元に立つて僕に問ふのです「ルンツ、貴様はまだ學問をやる積り

か、いゝえ僕はもう遣らない」

主人の妻「あゝ可哀さうに、神様、助けて上げて下さいまし」

ルンツ「さうだ、神よ、僕は猶太人です、僕は猶太の神に訴へます、神よ、復

復讐の神よ、神よ、復讐の神よ、御姿を現はし給へ！ 世界の審判者よ、立ち上つて奢れるものに復讐を與へ給へ、神よ、復讐の神よ御姿を現し給へ！
長女の夫『所刑者に復讐を下し給へ』

ルンツは黙して拳を握りたる儘出で行く。

長女の夫『トライチユ君、君はあの男を何う思ふかれ』

トラアク『實に氣の毒な青年です、學問を好いて居ながら、學問に仕へる事が出来ないのは實に氣の毒です、奥さん、僕は愉快な氣持で居るのですけれど

も、あの男の言葉を聞くと泣かないで居られません』

主人の妻『もう其事は言はないで下さいまし胸が張り裂けるやうです、あゝ、何時になつたら濟むのでせう、月日は経つて行きますけれども、もう妾は良い日に逢へないでせう、一生涯！』

ジトフ『ほんとうに堪らないです』

トライチユは長女の夫を傍に連れ行き、主人の妻の方に幾分か警戒し乍ら、何事かを呟く、最初の言を聞きて長女の夫は思はず頭を反らし、聲高に云ふ。

長女の夫『そんな事があるものか、ニコ……』

トライチユ『静！』(兩人呟く)

ポラアク『奥さん我々も神には傾らなくてはなりません、けれども、此不幸な青年の言つて居る復讐の神ではありません、恵と愛の神に傾るのです』

ジトフ『さうだ、種々な神があつて、種々な人の役に立つのだ』

主人の妻『あゝ、悴や、悴や！ 妾は諦らめて居るよ』

主人テルノウスキイ入り來り一同に挨拶す。

主人『あゝ君も此處に居たのかポラアク君』

ポラアク『先生、今日は僕の誕生日なのです』

主人「それはお目出度い」(彼と握手す)

ボラアク「それから僕は今日フアンニイ・エルストレム嬢との婚約を諸君に

御披露する光榮に浴したのです」

主人「ほう、それは益々御目出度い」

ボラアク「それも先生、外にお連れが出来さうなのです」

主人「愈々以て御目出度い、處でニコライの消息はありますか」

トライチュ「脱獄は確かに延びました」

長女の夫「天文学の先生、地の上には今、何んな事が起つて居るのか——、そ

れを貴方が御聞きになつたら——」

主人「何うしたのだ、又何か凶事でも起つたのか」

長女の夫「さうです空しき憂ひなんです(首を傍に傾け)僕が慙うやつて貴方

を見て居る時に獨りで考へるのです、此人には世界中で一人でも友達がある

のかしら、それとも全く獨法師で居るのかしらと」

主人(妻を指さし)「俺の友達は此處に居る」

主人の妻「およしなさいよ貴方、妾なぞが貴方の友達だつて、何にもなりやし

ません」

長女の夫「それはそれとして外に友達はありませんか」

主人「俺はまだ澤山の友達を持つて居る、しかし、俺はまだその人達に逢つた

事はない、一人は南阿弗利加に居る、其處で其人は天文臺を持つて居るのだ、

いま一人は伯爾西に居る——今一人は何處に居るか俺も知らない」

長女の夫「ぢや、行方不明なんですか」

主人「其人は百五十年前に死んで了つた、併しまだもう一人ある、其人を俺は

非常に慕つて居るけれども、まだ逢つた事はないのだ——其人はまだ生れて

居ないのだ、其人は凡そ七百五十年の後に生れる譯になつて居る、俺は既に

其人に、俺の観測の一部の後検査を委託したのだ」

長女の夫「それで其人が、確かに遣つて呉れると思つて在しやるのですか」

主人「さうだ」

長女の夫「實に珍しい友人の集團ですな、貴方は其人達を何處かの博物館に

寄贈なさい、ねえ、さうぢやないかトライチユ君」

トライチユ「私はテルノウスキイさんの友達が氣に入りました」

次男「荒々しく入り来りて四邊を見廻し」ルンツ君は何處に居ますか、皆居ま

すれ、可、可、で、ルンツ君は？」

主人の妻「お自分の室に在しやるんだらう、メエチャ、行つてお話をしてお上

げよ、あの方は今日は大變興奮して在しやるんだから」

次男「どうか皆さん——此處に待つて居て下さいまし、僕は一寸したお祝をし

やうと思つて居るんです、今日は非常な日ですからな」

ボラアク「多分、花火でも遣るんだらう、此いたづらなメエチャが。だけど幾

ら今日は非常な日でも、よくないと思ふが……」

次男「僕、直ぐ来ますから」(去る)

主人(ゆつくりと室内を往來す)「ボラアク君晴 雨計は今日は何うだれ」

ボラアク「非常に低くいんです、先生」

主人「さうのやうだれ」

ボラアク「磁針の振動から観測しますと、南緯に旋風が起つて居なきやならん

答です」

主人「さうだ、荒れて居るらしいな」

アンナ(主人の妻に)「メエチャは何か悪い事を企んで居るんですわ、阿母さん、

貴女はあの子をいゝ氣にさしては不可ませんよ」

主人の妻「でもあの子は何うする事も出来ないんだよ、お前の知つてる通り、

あの子は……」

長女の夫（トライチユと共に机の傍へ行き）「何と云ふ呪ふ可き寂寥だらう宛然墓の中に居るやうだ」

主人「さうか、私には、此處が何だか騒々しいやうに思はれる」

トライチユ（長女の夫に）「それからもう一つ、若し私が歸つて來ませんでしたら、妾の妻に恚う言つて下さいまし……」

長女の夫「それはよく分つてるよ、あゝ暑苦しい」

アンナ「妾には涼しいわ」

長女の夫「暑くつても涼しくつても——僕には同じ事だ、若し僕がもう一週間此處に居たら……」

ポラアク「皆さん、皆でお話しの出来るやうな題目を何か選ばうちやありませんか、議長には……」

ルンツ（入り來り）「誰か僕を呼びましたか、先生、僕をお呼びになりませんでしたか」

主人「いゝや」

ルンツ「でも、ヘエチャが僕に言ひました……」（行かんとす）

ポラアク「ルンツ君、まあ此處に居給へ、君は今少し落着たやうだね、僕は言ふがれ、僕は君の學問に對する意見には賛成出來ないよ」

ルンツ「放擲といて呉れ給へ、先生、僕は此文藝をお暇致し度いと思ひます」

ヘエチャの聲、月の外に聞ゆ「それ小性共や、公爵夫人に道をお開け申せ」と、ポラアク（笑ふ）「ハ、ア、ヘエチャだな、面白い子だ、聞き給へ、聞き給へ！」

戸口が開かれて、ヘエチャと一人の老婆入り來る、老婆は殆ど直角以上に腰が曲り居りて、辛ふじて歩む——貧と、老年と不幸の恐ろしき畫像、ヘエチャは老婆の手を執り、オペラを演ずるが如く嚴肅に前に進む、戸口にはミン

ナ、フランチツ其他召使の笑へる顔。

次男『皆さん、御紹介致します、之は私の美しい花嫁エレンです……』
長女の夫（無作法に笑ふ）『馬鹿な！』

アンナ『だから妾がさう言つたぢやありませんか』

ポラアク（立ち上り）『之は失敬だ、僕は自分の花嫁を玩弄にされて黙つては居

られない』

次男（聲高く）『可愛いエレンさん、皆さんに御挨拶をなさい』

老婆挨拶をなす。

ポラアク『僕は抗議を申込む、之は侮辱だ』

主人の妻『冗談なんだよ、マチユシユカ、もうおよし年寄を玩弄にするのはよ

くないよ』

ルンツ『いゝや、それは冗談ぢやありません、僕には解つて居ます』

次男『さて可愛いエレンさん、お話しをしませう、貴女はお幾歳ですか』（老婆は黙して首を振る）

次男『十七ですか——さうですか、貴女は十七なんですれ、エレンさん、貴女のお父さんの公爵も、お母さんの公爵夫人も此結婚を御承諾なさいましたか』
老婆は黙して唯首を振る。

ポラアク『先生、貴方のお宅で、僕は侮辱を受けて居るのです』

ルンツ（物狂はしく）『引込んで居給へ、唯も君の馬鹿な花嫁などに構つて居る

ものか』

ポラアク『ルンツ君、君は責任を持つてそんな事を言ふのか』

ルンツ『星奴、呪ふべき星奴』

次男『可愛いエレンさん、僕は嬉しいのです貴方は薔薇の香ひが解りますか、鶯が庭で鳴いてるのが聞えますか、鶯は二人の愛を歌つて居るのです、可愛

「い、エレンさん、可愛い……」

ルンツ「呪ふべき星奴！」

次男「貴女の口はい、香ひがします、可愛いエレンさん」

ルンツ「さうだ、さうだ」

次男「貴女の齒は真珠のやうです……」

ルンツ「さうだ、さうだ」

次男「貴方の頬は柔らかいですね、……あ、僕は狂氣になる強貴女を愛して居ります、可愛いエレンさん、何故貴女は、人を迷はすやうな目で、恥しさに俯いて在しやるのですか」

ルンツ「實に恥辱だ、ポラアク君、君は恥辱とは思はぬか、へん！ 學問などを！ 君には分るか、あれば僕の老母だぜ……」

ポラアク「分らないね……」

次男「可愛いエレンさん、貴女はすらりとした姿を起して私の妻だと思張つて言つて下さい、貴女に抱かれると、私の不安な心にも永久の平和を見出すことが出来ます」

老婆は首を振る。

アンナ「皆な癡狂病院へ入れて了ふがいわ」

長女の夫（驚き）「アンナ、黙つてお出で」

ポラアク「丁度あの何かのやうですな……」

ルンツ「黙れパリサイ人、黙らないと承知しないぞ……あれは僕の老母だ、（老婆に）お婆さん、彼は次男を傍に押し除け）ねえ聞いて下さいお婆さん……僕は貴女の前に跪きます、僕は詰らない猶太人です、貴女は僕のお母さんです——僕に貴女の手を接吻させて下さい……」

次男（叫ぶ）「いや、それは僕の花嫁だ」

ルンツ『いや、僕の阿母さんだ、觸つてはならん！』

アンナ『早く水でも持つて来てお遣りよ』

ルンツ『お婆さん、僕を免して下さい、僕は學問が好きでした、僕は馬鹿な猶

太人です、猶太人の……』

長女の夫（トライイチユに）『何うしたらいいだらう』

トライイチユ『放擲つてお置きなさい』

ルンツ『僕は貴女丈が好きです、お婆さん、僕は貴女に私の頭を進げませう、

心臓を進げませう、あゝ呪ふ可き星奴！』

トライイチユ『ルンツ君、僕と一緒に行きませんか』

次男（叫ぶ）『それは僕の花嫁です』

主人の妻『まあ、ベチユシユカ、お前何うおしなの』

アンナ『水を持つてお出でよ』

ルンツ『さうだ、僕は君と一緒に往かう、そして神に誓はう……』

長女の夫『まだ君等は黙らないか、君は！』

次男、痙攣して昏倒す、トライイチユの外一同駈け寄り、主人は一步前に出

る、されど踏み止まりてルンツを凝つと見る。

ルンツ（跪き居る）『お婆さん、御覽なさい僕は泣いて居ります、お婆さん――

學問の好きだった小さな猶太人の僕は泣いて居ります、貴女は僕の阿母さんで

す、さうです、僕の阿母さんです、僕は神に誓ひます、僕の生涯を貴女に捧

げます、僕の愛するお婆さん、僕は泣いて居ります……おゝ呪ふべき星奴！』

第 四 幕

舞臺の右手の角は、横断した天文臺の圓頂間、其三分の一は舞臺の背後に在

り、圓頂閣の周圍には鐵柵を有する低き望廊。舞臺の下部は、天文臺の主なる建築物の屋根と併びに朦朧たる山の輪廓により形成さる。其他は夜の空の單一にして而も權ある一部。星宿。圓頂閣の内部は頗る暗し。左手には大なる析光器の輪廓不明瞭に現はる。二脚の卓、其上には、黒くして光の透らざる蓋を有する洋燈。圓頂閣の扉は開かれたり、星と空は、室内を覗き込む、階下に行く階段も、同様に横斷され居る。寂莫、節度計の低き音、主人テルノウスキイとボラアクと次男ベエチヤ。

ボラアク『では先生、何卒寫眞室にお氣を付けて下さいまし、僕は是非とも表を作り上げて了はなければなりませんから彼方へ参ります』

主人『ではまた後程』

ボラアク（次男に挨拶し）『今日は何うですか、若いウラニア女神の坊さん』

次男『有難う、大變いゝのです』

ボラアク『あんなに結婚をし度がつて居た、哀れなボラアクを二度と擲擲ふのは止ませうね』

次男『僕は斷言します、僕は決してそんな積りでは……』

ボラアク『それは判つて居ます、それは判つて居ます』

主人『あの時は病氣だったのだからだ』

ボラアク『先生、冗談で御座いますよ、僕は自分に滑稽な分子が大分あることを發見して我ながら驚いて居るのです、今日もフランツがミルクを零しました時に、私は恚んなに申しました。フランツ、君はミルクイ、ウエイ（銀河）から飛び出して来たやうだね——するとフランツは酷く笑ひました（聲高く笑ふ）併し細かいことは申しません、では又後程』（去る）

次男『ボラアクと云ふ人はお可笑しな人ですね、阿父さん、僕は此處に居てもお邪魔にはなりませんか』

主人「いゝや構はん」

次男「僕は下へ行き度くないのです、下は今あんなに淋しいのですもの、阿父

さん、阿父さんばもう御存じでせうがシトフ君が昨日カイロから電報を打つ

て参りました「僕は此處に坐つてピラミッドを眺めて居る」と言つて。阿父

さん、貴方はピラミッドを御覧になりましたか」

主人「ウン、あるよ、だがお前、下では母さんが一人で淋しがつて居やしない

か」

次男「母さんばもう寝て居ます、晝は僕、母さんと大抵一緒に居るのです、母

さんは始終コオリヤ兄さんのこと許り心配して居ります」

主人「何にも消息は無いかれ、アンナからも何の消息も無いかれ」

次男「無いのです、姉さんは手紙を書きません、また何も確りしたことが分ら

ないんです、僕は幾度も繰返して其事をお母さんに話して聞かせました、だ

けどお父さんも知つて居るでせうが、女と話をするのは面倒なものですれ……

さあ、僕はもう邪覺をしません……お父さんは又計算をして在しやるのですか」

主人「あゝ少しやつて居るよ、俺は少々疲れた」

次男「では、僕何か讀みませうか、さうくお父さん、僕は昨日或る雑誌を讀

みました、阿父さんは星雲に關する何か大きな発見をなすつて第一流の研

究家の中にお入りになつたんですつてね」

主人「其発見は十年も前にやつたのだ、天文學上の名譽など云ふものは遅れ

て来るものだ——僅かな人達が僕等の仕事に興味を持つて居るんだから」

次男「僕も今迄少しも知りませんでした」

主人「俺等は埃及の坊さんのやうに、昔から孤獨な生活を續けて居るのだ、我

々の意志では無いけれども」

次男「馬鹿らしいですれ、阿父さん——では何故僕が病氣になつた時に阿父さ

んは僕を此處へ連れて在したのですか、僕は屹度阿父さんの邪魔をしたでせう」

主人「そんなことはないよ、俺は何も可愛いものがあると、此處へ連れて来て来て仕方がないのだ、此處には苦痛もなければ病氣も無いと云ふ餘程をかしな確信を俺は持つて居るのだ、此處には——唯星があるのだ」

次男「僕が或るとき夜中に眼を覺まして阿父さんを見ると、お父さんは星を眺めて在しやいました、其時は、唯静かで、そして阿父さんは星を見て在しやいました。其時僕に解つたのです——いえ、僕は或ことを感じたのです、何だか解らないけれども、僕はそれを説明することは出来ません、僕は阿父さんと、星と、僕と、唯之丈が世界に居るのだと思ひました、また僕達は何う死んで了つたのぢやないかとも思ひました、だけれども其ことが僕には毫とも恐くはありませんでした、却つて平安で、愉快で、清々しました、僕には

まだ前の通りに、何の爲に生があり、何の爲に老年があり、何の爲に死があるのか、それは解りませんが、今ではそんな事が何うでもいゝやうになつて來ました、さあ、お仕事をなさい、阿父さん、僕はボラアクさんの言ふやうに細かいことは申しません」

主人(深思して)「さうだ、人間と云ふものは自分の生と、自分の死と云ふ事に就いてのみ考へるものだ、それが爲に人間は丁度穴の中に陥込んだ瓢虫のやうに、生活が恐ろしくなり、厭になるのだ。其恐ろしい空虚を充す爲に人間は多くの美しい事や、強い事を考へる——けれども人間の考へた處の事は矢張り死に關することや、生に關する事許りであるから、徒らに恐怖が増す許りだ、そして、人間は蠅人形陳列場の持主のやうな者だ。——さうだ蠅人形陳列場の持主だ、晝の間は、見物人と話をし乍ら金を儲けて居るが、夜になると彼は生活の無い、死人や、靈魂の無いものゝ間を、獨りで彷徨ふのだ、

若し人間が何處へ行つても生許りで、決して死は無いものだと言ふことを知つたならば！』

次男『阿父さん、僕が今迄に一番恐い事に出遇したのを何だか御存じですか、僕は或一つの椅子を見ると急に恐ろしくなつて大聲で叫びました』

主人『人間の思想と云ふものは、丁度鳥のやうなもので——空間に於ける強い、自由な帝王だ、けれども人は自分の思想の翼を縛つて嘘の針金で拵へた鳥籠の中に入れて了ふ、其鳥は金網を通して大空の誘惑に苛々し、又は外の鳥と喧嘩をし、遂には飛び出すことも出来ずして、鈍くなり、馬鹿になる』

次男『哀れな空間の王ですね』

主人『さうだ、有ゆるものは生きて居るのだ、若し人間が第一にそれを知る、とが出来たならば、彼等は希臘人のやうに、異教徒のやうに、楽しく日を暮して行くことが出来るだらう、新たに樹林神や、水神が現れるだらう、エル

フが月光の中で躍るだらう、人間は森の中を迷ひ、木や、花と話をすることが出来たのだ、金でも、石でも、木でも、凡ての物が生きて居るのだから、人間は決して獨りになることはないのだ』

次男（笑ふ）『阿父さんは、なかなかな方ですね』

主人『さうか、何うして』

次男『阿父さんは、椅子に對して 禮儀が正しいのです、いゝえそれはほんとうです、貴方は生て居ない物に對してさへ禮儀が正しいのです、貴方は物を手にお取りになるんでも、禮儀正しくなさいます。それは僕、説明は出来ませんけれど、阿父さんは随分放心な方で在らつしやり乍ら歩くのが上手から物に當つたり打突つたり、物をお落しなすつた事杯はありません、若しアンダアセンの物語にあるやうに、夜中に椅子や戸棚や、コップが集つて話を始め出したら屹度阿父さんの事を讀めたてる許りでせう』

主人「ウム、さう思ふか。椅子が物を云ふのは氣に入つたな」

次男「そして若しお父さんが此處へ出て在しつたらば、何んなことが始まるか

お思ひですか、蛇度種々な物が歌を歌ひ出すでせう」

主人「俺が其處に居つても歌ふぢやらう」

次男「望遠鏡が最低音を歌ふでせう、さうぢやありませんか」

主人「お前は星が歌ふのを聞いた事があるか」

次男「ありません」

主人「星は歌ふよ、其歌は「永遠」と云つたやうな不思議なものだ、唯一度で

も無窮の空間の奥底から響いて来る聲を聞いたものは——永遠の子になれる

のだ！ 永遠の子——さうだ、ベエチャ、將來人間は爾う呼ばれるだらう」

次男（笑ふ）「阿父さん、怒らないで下さい——ポラアクさんも永遠の子なんで

すか」

主人「恐らくさうだらう」

次男「でも、あんなに馬鹿で、諒見が狭いのですもの……だけど、もう何も言

ひません、僕はもう坐ります、此處の空氣は何て清々して居るんでせう、下

には決して恁んな空氣はありやしません、貴方はまた考へて在しやるのです

か」

主人「さうだ」

次男「ちや、お考へなさい、今度は僕本を讀みます」(沈黙)

次男「レンツ君が行つてから、もう今日で丁度三週間になりますね」

主人「さうか」

沈黙、次男讀書す、主人沈思より覺めて徐ろに仕事に取り掛る。主人、仕事

す。

次男「始めての晩、僕がまだ熱に浮かされて居た時分、僕は析光器が恐くつて

なりませんでした、あの器械は星の行く通りに動く動いて居るのです、ですから僕が眼を開ける度に、前よりは少し宛動いて居るのです、そして、それが——何う云ふ理由だが別らないが——僕には一つの大きな黒い眼の様に見えたとのです——明瞭した小さな襲のある外套を着た——。』
沈黙、主人は仕事を止め、手にて顎を支えて、深く思ひ込める様、下より音楽響き来る、一二の不安にして、哀調を帯びたる和音の「牢屋の内に囚へられ、我は悶へて此處にあり」。

次男(跳上り)「何だらう？ あの音楽は？ 誰か居るのだらう、下には母さん一人の筈だが」

主人「爾うだ、多分マルシヤだらう」

次男(聲高く叫ぶ)「マルシヤが来たんだ！ 僕直ぐ歸つて來ます、直ぐと」(下

に急ぎ行く)

主人(深思して)「永遠の子……爾うだ、人間は一度は爾う呼ばれるぢやらう」

より長き沈黙。階段にマルシヤとベエチヤ現はる。

マルシヤ「泣いちや不可わ、泣いたつて仕方がないぢやありませんか、さ、母様の所へ行つてお進なさい」

次男、嗚咽を壓へながら泣く。

マルシヤ「さ、行つてお進なさい、母様は一人ぢやありませんか、ついて居てお進なさい——貴下は男ぢやありませんか」

次男「そして、貴女は」

マルシヤ「妾には誰も付て居なくても可いの、さ、行つしやい」(ベエチヤの額に接吻して別る)

主人「マルシヤか！ よく來て呉れたな！ お前は眞實とは思はぬかも知れぬ

「が、俺は何事でも豫め感ずる事が出来るのぢや、今日も一日、お前が来る様な感じがして居たのぢや」

マルシヤ「阿父様、御機嫌よう御座います、お仕事で御座いますか」

主人「ニコライは何うした、逃出したか」

マルシヤ「え、牢屋からは出ましたの」

主人「此處に来て居るのか」

マルシヤ「いゝえ」

主人「然し、もう大丈夫なのか、マルシヤ」

マルシヤ「え、え」

主人「可愛相に、嘘ぞ疲れたらう、俺はな、今日一日、お前とニコライの事許り考へて居たのだ、俺はお前と今話を仕やうとは思はぬ、——だが、マルシヤ、お前は音楽のやうな女だ、俺は嬉しいのぢや、何うかお前の柔かい手を

接吻さして呉れ、鐵の錠や、鐵の格子を扱かつて来た手を！（嚴肅にマルシヤの手を接吻する）さア、坐つてお話し！」

マルシヤ（望廊を指し）「彼處へ出ませう」

主人「俺は嬉しくてならぬ、俺がお前の椅子を持って行つて遣らう、大層疲れて居る様ぢやな、マルシヤ！（二人は上り行く）さア、お掛け、此處は奇麗ぢやないか」

マルシヤ「ええ、奇麗ですことねえ」

主人「私は今までベエチャと一緒に居たのぢや、あれは可愛い兒でなア！ 近頃俺は、あの子を見るとニコライを想ひ出す……」

マルシヤ「爾うですか」

主人「だがベエチャには、女の様な、弱々しい所がある、俺は何時其を心配して居る、夫と反對にニコライは精力の強い、大膽な男ぢや、總てに調子が

に界世の星

よくつて、すうりとして居て、優美で、強い、あれは男らしい人間の、立派なモデルだ、自然が繰返すまいとして、自然が破壊して丁ふ稀有な美しい型ぢや」

マルシヤ『ええ、——毀して丁ふのですわ……妾も爾う云はうと思つて居ました……』

主人『あれは、若々しい神の様に人の心を捕へ、とても抵抗ふ事の出来ない様な魅力を持てゐる、世間の有ゆる者があれを愛した、アンナの様な女でさへも——。あれは實に美しい、マルシヤ、お前は定めて馬鹿々々しい事に仕て了ふかも知れないが、俺にはあのニコライが、星の空の様に思はれるのぢや、日の出前の星の空の様に』

マルシヤ『ええ、日の出前の、星の空の様に』

主人『あれは、逃さずに居られなかつたらう、それは確かに爾うあるべきぢや』

や、監獄——監獄とは何だ——錆た錠や、腐ち果てた格子ではないか、俺は彼奴等が、何うして彼様に長くあれを捕へて置いたかと思つて、それを呆れるのぢや、彼奴等は幸福な若い王子に對する様に、身を退いて、笑つて道を開けたぢやらうと思ふ』

マルシヤ（苦悶して、跪く）『阿父様、阿父様、……あゝ恐しい』

主人『何うしたのだ——何うしたのだマルシヤ』

マルシヤ『美しい型は壊されて了つたのですわ、阿父様——美しい型は壊されて了つたのですわ——』

主人『ニコライは死だのか、さあ話して呉れ』

マルシヤ『あの人は……理性を失つたのです』（沈黙）

マルシヤ（躍り上つて）『それが何でせう！ あゝ、呪はしい人生よ！——こんな人生の神様は何處に居るのでせう、何處に神様の眼があるのでせう？ あゝ』

呪はしい人生！ 涙で溶けて了へ、滅んで了へ、一番善いものが滅びて了へ、一番立派な型が壊されて了ふ位ならば、生きて居たつて何になるものか、阿父さん解りますか、もう世の中に生きて居る理由がありません、生きて居る理由がありません」

主人「すつかり話してお呉れ」

マルシヤ「何の爲に話すのですか、話す事が出来ると思つて在しやるんですか、話をするには理解しなければなりません、けれども理解が行きますか」

主人「話してお呉れ」

マルシヤ「あの人は妾の旗でした、あの野蠻人共があの人を牢屋に投げ込んだ時、妾は慥んなに思ひました、彼奴等は野蠻人だけれども、あの人は太陽だ、又こんなにも思ひました、あの人を愛する總ての者が直ぐと起ち上つて牢屋を叩き壊して了ふだらう——そして、新に妾の太陽が輝いて来るに違ひない

と、あゝ妾の太陽！」

主人「何うしてそんなことになつたのだ」

マルシヤ「何うして星は消えるのでせう、何うして捕へられた鳥は死ぬるのでせう、あの人は歌を歌はなくなつて了ひました、顔の色は青白く悲しさうになりました、けれども妾を慰めやうとして居りました、たつた一度慥んなに言ひました、僕には鐵の格子と云ふものが理解出來ぬ、一體此の鐵の格子とは何だ——それは私と天の間にあるものだ！」

主人「私と天の間！」

マルシヤ「丁度其時に囚人共が打たれたのです、さうです、牢屋の中に暴動があつたのです、看守が室の中に飛び込んで来て、囚人を一人々々打つたのです、拳固で打つたのです、足蹴にしたのです、顔を殴り曲げたのです、随分酷く打ちました、随分長い間——あの馬鹿な冷血動物が——、ニコライも、

それを逃れることは出来なかつたのですわ、妾が逢つた時、あの人の顔は、もう恐ろしくなつて居ました、あの全世界に向つて笑つて居るやうな愛らしい、美しい顔が——彼奴等が、あの人の口を引き裂いたのです、——一度も嘘を言つたことのないあの唇を、彼奴等が、あの人の眼を抉り出したのですわ、——いつでも美しい物計り見て居たあの眼を。阿父さん、之が理解出来ますか、之を正當なりと認めることが出来ますか』

主人『それから何うした』

マルシヤ『その時から、もう恐ろしい死のやうな憂鬱が始まつたのです、あの人は誰をも恨みませんでした、看守でさへも、虐殺者でさへも、妾に辯護しました……けれども暗い憂鬱はあの人の眼の中に現はれて來ました、あの人の魂は死んで了つたのです、それでもまだ妾を安心させやうとしますので、それでも、まだ妾を慰めやうとするのです、そして唯つた一度慙う云ふこと

を言ひました、僕は僕の魂の中に全世界の苦痛を擔つて居るのだと』

主人『それから何うした』

マルシヤ『記憶力が無くなつて了ひましたの、同時に口をきかなくなりました、黙つて妾の傍に來て、——黙つて妾の傍に坐つて、そしてまた黙つて行つて了ひますの、あの人の眼は大きく、黒くなつて、全世界の苦痛が其中から覗いてるやうに見えましたわ——阿父さん、妾はまだ、恁んな美しいものを見た事がありませんでした。昨日面會に行きましたら、あの人はもう病院に入られて居りました、附添のものが散歩に連れ出さうとした時にあの人は階段から眞倒まに身を投げやうとしたのです、けれども、人々がそれを止めて呉れました、そして其時から狂氣になつて了つたのです、狹窄衣(狂人の)を着せられる……』

主人『お前は逢つたのか』

マルシヤ「え、逢ひました、けれども其事はお話し致しますまい、とてもお話しは出来ません、美しい型は壊されたのですものな」

主人「豫言者と云ふ者はいつの世でも殺されるのだ」

マルシヤ「でも阿父さん、妾達は、豫言者を殺すやうな世の中に、何うして生きて行かれますう！ 何處へ妾は行きませうか、とてももう辛抱出来ません、妾は人間の顔を見ることが出来ないのですわ——恐くつて、人の顔は——ほんとうに恐いのですもの、ほんとうに人の顔は。妾の涙は乾いて了ひました、妾に残つて居るものはあの人の陰鬱と同じやうな、死のやうな最後の憂鬱丈ですわ、でも御覧なさい、妾、落着いて居ますわ。あら——大層な星ですわ
れえ」

主人「そしてインナ(妻)はそれを知つて居るのかい」
マルシヤ「え」

主人「醫者は何う言つてるのだい」

マルシヤ「お醫者は言ふのです、もう白痴になつたのですつて」

主人「ニコライが——白痴だとい」

マルシヤ「え、あの人は長生きをするでせう、無感覺になつて澤山飲んだり、食べたりするでせう、肥え太つて、年寄になる迄生き延びるでせう、いつも幸福で居るでせう」

主人「ニコライが白痴だとい——それは想像することも出来ない、あの立派な男が、あの調子の良い、はつきりした靈魂が、闇黒の中へ、慰めの無い哀れな、不確な混沌の中に沈み果てるとは。ではもう、顔も醜くなつたかマルシヤ」
マルシヤ(憂はしげに)「え、奇麗ぢやありません、それが御心配なのですか」
主人「俺はお前が落着いて居るので嬉しくつてならぬ、俺はお前がこんなに強い女だとは思つて居なかつた」

マルシヤ「妾はもう、此一月以來、毎日々々こんな苦痛を経験して参りました、妾はもうそれに馴れて了つたのですわ、阿父さん習慣と云ふ事は或つとしたら、狂氣の一種ぢやないでせうか」

主人「お前はそれで何うする積りだ」

マルシヤ「解りませんわ、妾はまだそんな事を考へないのですわ、妾は新墓の傍で自分の新しい生活を考へることは恥しくつて出来ませんわ、犬でさへも、小犬の死んだのを忘れるには時が要りますもの」

主人「ニコライの事は俺が世話をして遣る、あれはもう澤山の手は要らない、お前はもうあれに逢ひに行つては不可ないぞ、決して逢ひに行つてはならぬいぞ！」

マルシヤ「いゝえ、妾は逢ひに参りますわ」

主人「それは神を嘲弄すると云ふものだ、それは、人の死骸を室の中に置いて

くと同じやうに神を嘲弄すると云ふものだ、死骸は焼かなくちやならない」

マルシヤ「あの方の死骸ならば、いつまでも妾の室に置きませう」

主人「何の爲に？」

マルシヤ「貴方は、あの可愛いエレンを御存知ですか、あれを妾の處へ連れて参ります」

主人「その事は、誰かに逆らう事になるのだぞ」

マルシヤ「それは知りませんわ、貴方に逆らうのでせう」

主人「俺に逆らう！」

マルシヤ「妾は、妾のすべき仕事は今解つて参りました、妾は一つの町を建てませう、その町にはあの可愛いエレンのやうな年寄や、乞食や、狂人や、盲人を移住させませう、其處には生れ付きの、啞や聾や、白痴を連れて参りませう、其處には癩病や、卒中の人を連れて参りませう、殺人者をも連れて來

ませう……』

主人『マルシヤ、俺はお前が氣の毒でならぬ』

マルシヤ『それから、其處へは謀反人や、嘘言者や、人間に似た動物や、野獸よりも恐ろしい者を連れて参りませう、其町の家は、其處に住つて居る人と同じで、跛で、脊虫で、盲目で、瘤だらけですわ、家其ものが殺人者であり、謀反人なのですわ、其家は住つて居る人の頭の上に落ちて参りませう、家が嘘を吐き、家が縊り殺すのですわ、其處にはいつも恐ろしい虐殺や、飢渴や、悲鳴があるのですわ、町の王にはイスカリオテのユダを連れて参りませう、町の名前は「星の世界に！」とませう』

主人『可哀さうにマルシヤ、俺はお前が氣の毒でならぬ』

マルシヤ『其の同情は何卒お藏ひ置き下さい、貴方は貴方のお子さん可愛さうだと思ひにならないのですか』

主人『俺には一人も子供はないのぢや、俺に取つては、あらゆる人間が平等なのぢや』

マルシヤ『冷淡ですわね、妾は貴方のお心が解りませんわ』

主人『それは俺が、あらゆるものに就いて考へて居るからぢや、俺は、過去に就いて考へて居る、未來に就いて考へて居る、地上のことを考へて居る、星の世界に就いて考へて居る——有ゆるものに就いて考へて居るのぢや、過去の霧の中に俺は滅びて了つた處の幾百萬の人間を見るのだ、又未來の霧の中に滅びんとする無数の人を見るのだ、俺は宇宙を見て居るのだ、俺は至る處に勝ち誇れる人を、無限の潮に溢れた人生を見て居るのだ、俺は唯一人の爲に悲しむことは出來んのぢや』

階段の上にハエチャと主人の妻現はる。彼女は辛ふじて歩み、ハエチャに體を支へ、二人は靜に望廊に出來来る。

主人の妻（夫に縋り付き）『コリュシユカが、妾達のコリュシユカが！……』
次男『母さん、泣いてはいけません』

主人の妻『コリュシユカが！』

主人（妻を助けて下に坐らせ、臆て立ち上りて叫ぶ）『彼等が俺の子供を奪つた、
氣狂ひ共奴が！ 自分自身に抵抗しを居る盲目共奴が！』

主人の妻『阿父さん、確りなさいまし、辛抱して生きて参りませう、あゝコリ
ユシユカが、妾のコリュシユカが……』

主人『若し太陽が低い處にあれば——彼奴等は太陽でさへも消さうとする奴だ、
そして闇黒の中に死ぬ奴等だ、奴等は俺の子供を取つた、奴等は俺の光を奪
つた！』（地團太踏む）

マエチヤとマルシヤは泣き乍ら跪き、主人の妻を勉はる、主人は二三歩離れ、
臆てまた歸り来る。

マルシヤ『お父さん、何うぞ免して下さい！』

主人『泣いてはいかん、泣いてはいかん、我々には思想と云ふものがある、我
我には思想と云ふものがある——それが我々を助ける筈だ……さうだ、さう
だ、俺はもう餘程年を取つたに相違ない』

主人の妻『あゝ、コリュシユカ！』

主人『そんなことは何でもない！ 人生は——あゝ人生は到る處にあるんだ、
今も、此瞬間でさへも——さうだ、此瞬間でさへも——誰れかゝ生れて居るに
違ひない、ニコライと同じやうな人が、さうだ、さうだ、ニコライよりも
つといゝ人間が、自然は決して繰り返しをやらない筈だから』

主人の妻『あゝコリュシユカ！』

マルシヤ『其人は狂人になる爲に、又死ぬる爲に生れるのでせう、矢張り阿母
さんを泣かせる爲に生れるのでせう、阿父さんさう云ふ意味で仰つたのです

主人の妻『あゝコリュシユカ！』

主人の妻『あゝコリュシユカ！』

主人「阿母さんを泣かせる爲に！ さうだ、さうだ、其人も死ぬだらう、其人も死ぬだらう、マルシヤ、人生と云ふものは植木屋のやうなもので、美しい花を切り取つて了ふのだ、だが其香ひは地上に満ち／＼して居る、彼處を御覽、あの際涯のない空を御覽、あの想像力に満ちた深い深い大洋を御覽、實に彼處は静だ、けれども若しお前が、空間を通して聞く事が出来たり、又無窮を通して見る事が出来たらば、恐らくお前は恐怖の餘り死んで了ふだらう、でなければ歡喜の餘り焼けて了ふだらう、酷冷な狂氣のやうな重力の法則に従つて、無数の世界が空間を自分の軌道に沿ふて回轉して居るのだ、そしてそれらの上に唯一つの偉大な、唯一つの不滅な靈が支配して居るのだ』

マルシヤ（立ち上り）「どうぞ、神様の事は話さないで下さいまし』

主人「俺は吾々に似た實在に就いて話して居る、其れは吾々と同じ様に苦み、

吾々と同じ様に考へ、吾々と同じ様に探し求めて居る、俺は其を見た事はない、けれども友の様に、仲間の様に愛して居る、二つの知らざる力が偶然に會合して、其處に最初の生が……最も小さなアミバの生が、プロトプラスムの生が燃出した其瞬間——もう其瞬間から、是等の光を放つ巨大な物體は其主人を發見したのである、それは此處に居り、或は彼處に居る吾々である、ああ偉大なる天の空間！ 太古の秘密！ 汝は我が頭上にある、汝は我が靈の内にある、汝は我が脚下にある、汝の主人の脚下にある』

マルシヤ（天を指し）「阿父様、星は黙つて居ります、星は妾達の上で笑つて居ります』

主人「然し、俺が命令すれば——星は言を言ふ、彼處の、あの青い深みへ、俺が眼光を送れば、星は空間を通して滑りながら、今まで人の見なかつたことを理解する、俺が呼べば、あの深い闇黒から、俺の聲を聞いて慄へながら秘

密が滑り出る、それは、怒と恐れの前に身を屈め、裂けた舌を振り、盲目の目を光す——無力な、哀れな怪物だ、そして、俺は、永遠と無窮に對して恠んなに叫ぶのだ、我は汝を祝す、汝永遠の子よ！ 我は汝を祝す、我が遙なる未知の友よ！」

マルシヤ「けれども、死と云ふものがありますわ、狂氣がありますわ、野蠻な奴隷の勝利がありますわ、阿父様、妾は地を離れることは出来ません、地を離なれ度くはありません、他は不幸なんですもの、地は悲みと恐れを呼吸して居ります、けれども妾は地から産れたのですもの、妾の血の中に、妾は地の苦みを持つて居ります、星は妾に取つては他人ですわ、彼處に住んで居るものを妾は知りませんわ——妾の魂は、傷いた鳥の様に、絶えず地の上に落ちて行きます」

主人「死と云ふものは決してないのぢや」

マルシヤ「ではニコライは？ 貴下の御子さんは何うしたのです？」

主人「ニコライはお前の中に居る、ヘエチャの中に居る、俺の中に居る——、あれは、あれの靈の匂ひを信實に守る有ゆる人の中に居る、恐らく、シヨルダノオ・アルノオは死んで居やあ仕まい！」

マルシヤ「でもその人は偉人の一人ですわ」

主人「死ぬものは、人相を持つて居ない動物だけだ、唯殺す者のみが、死ぬるのだ、殺されるもの、焼れる者、引裂れるものは——永遠に活るのだ、人間には、死と云ふものはない、永遠の子には死はないのぢや！」

主人の妻「コリュシユカ！ コリュシユカ！」

主人「古代のお寺には永久の火と云ふものが保存されて居た、木は灰になり、油は燃え盡す、——けれども火は永遠に保存された、お前はそれを感じないか——此處にも、其處にも、到る所に？ お前はお前の體中に、清い火が燃

えて居ると感じないか、誰がお前に其の優美なる靈を授けたのだ、其の思想は、滅ぶべき肉體を離れても、お前の中に、更に長く活るのだ——お前はそれを、お前の思想ぢやと言ふことが出来るか、お前の魂は、永遠の兒が、神に仕へる神壇ぢや！（手を星の方に高く上げ）我は汝を祝す、我が遙かなる未知の友よ！

マルシヤ「妾は人生へ歸りますわ」

主人「お行き——お前が人生から受けて来たものを、人生に返すが可い、太陽に熱を返すが可い、お前もニコライの様に死ぬるぢやらう、限りなき幸福な靈を以て、永遠の火を養ふ所の、運命を有する人々の饗に——併しお前は、お前の死に依つて不滅に達する事が出来るだらう、星の世界に」入ることが出来るのだ！」

次男「阿父様、泣いて在つしやいますね、僕に、貴下の手をキッスさして下さ

い、僕に！」

主人の妻「泣かないで下さい……、阿父様、何うにでもして……妾達は生きて行かないやなりません……もつと生きて行きますせう」

マルシヤ「妾は行きます、ニコライが残して行つたものを、神聖な物のやうにして保護して参りませう——あの人の思想や、あの人の優しい愛や、あの人の優しい心や、妾の中にあるあの人を、何度殺されても——妾はあの人の清い、無垢な靈を地上に高く捧げて参りませう」

主人（兩の手を高く星の方に伸し）「我は汝を祝す、我が遙かなる未知の友よ！」

マルシヤ（兩の手を地に伸し）「我は祝す、我が愛する苦痛の友よ！」

主人の妻「コリュシユカ……コリュシユカ……」
（本書は Scholz の獨逸譯より重譯せり——有 歌 生）
全譯『星の世界に！』（終）

大正三年十一月三十日印刷
大正三年十一月三日發行

(定價金拾錢)

(郵稅金貳錢)

著者 守田有秋

發行者 營谷與吉
東京市下谷區御徒町一丁目十番地

發行者 大川錠吉
東京市淺草區三好町七番地

印刷者 高橋郁
東京市京橋區弓町二十五番地

印刷所 三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町二十五番地

名著叢書
第十四編
星の世に

不許複製

發行所

東京市下谷區和泉橋通
御徒町一丁目十番地

日吉堂本店

(振替東京二五二六七番)

名著叢書

毎月數篇 定價各金拾錢
逐次刊行 郵稅各金貳錢

▲本叢書は世界文藝の粹を蒐めたるもの也
▲本叢書の紙數は各百頁以上百五十頁以下
▲本叢書は丁寧親切を以て特色とす

- ▼第一篇 守田有秋 原作
ズーデルマン
- ▼第二篇 小島春潮 譯作
メーテルリンク
- ▼第三篇 守田有秋 譯作
ペルシヤ大文學
- ▼第四篇 海原曙雲 譯作
ツルゲネエフ
- ▼第五篇 小島春潮 譯作
トルストイ
- ▼第一篇 マダ (一名故郷)
- ▼第二篇 タンタチールの死 (附群盲)
- ▼第三篇 一千一夜物語 (上 卷)
- ▼第四篇 春の潮
- ▼第五篇 カチユーシヤ (二名復活)

- ▼第六篇 守田有秋 譯作
ペルシヤ大文學
- ▼第七篇 杉本繁夫 譯作
セーキスピヤ
- ▼第八篇 守田有秋 譯作
ペルシヤ大文學
- ▼第九篇 守田有秋 譯作
ホフマンスタール (譯全)
- ▼第十篇 小島春潮 譯作
イグナツ
- ▼第十一篇 杉本繁夫 譯作
ヒネロ
- ▼第十二篇 守田有秋 譯作
イブセン
- ▼第十三篇 小島春潮 譯作
セーキスピヤ
- ▼第十四篇 守田有秋 譯作
アンドレ
- ▼第六篇 一千一夜物語 (中 卷)
アラビヤナイト
- ▼第七篇 ヴエニス商人 (一名人肉)
アラビヤナイト (抵當裁判)
- ▼第八篇 一千一夜物語 (下 卷)
アラビヤナイト
- ▼第九篇 エレクトラ 姫 (一名女ハ)
アラビヤナイト (ムレツト)
- ▼第十篇 幽霊
- ▼第十一篇 ポオ 生 (後のタンカ)
レイ夫人
- ▼第十二篇 蘇生 (後のタンカ)
レイ夫人
- ▼第十三篇 才口 日
- ▼第十四篇 星の世界に

— (以下續刊) —

終

